

哲学者井上忠の生涯：アメリカ留学から『哲学の現場』まで

伊 佐 敷 隆 弘

はじめに

本稿の目的は、哲学者井上忠^{いのうえただし}（1926～2014年、東京大学名誉教授）がどのような生涯をたどったのかを明らかにすることである。井上忠の哲学自体については、伊佐敷隆弘「根拠と経験——井上忠の哲学を『ギリシア哲学解釈』という枠からはずす¹⁾」で既に論じた。また、誕生から若手研究者時代（41歳）までについては別稿²⁾で論じた。ここでは、それ以降、アメリカ留学（41～42歳）から二つの著書『根拠よりの挑戦』（48歳）と『哲学の現場』（54歳）を公刊するまでの時期を扱う。

目 次

- I アメリカ留学
 - 1 論文「イデアイ」の完成
 - 2 留学への決意
 - 3 オーエンとの出会い
 - 4 初めての外国生活
- II 帰国後の再出発
 - 1 日本への帰国
 - 2 金曜哲学会を始める
 - 3 授業のようす
 - 4 『哲学の現場』
- III 留学前後の連続性と不連続性
 - 1 「根拠」のゆくえ
 - 2 「現存のアポリア」

1) 哲学会編『根拠・言語・存在』（『哲学雑誌』第131巻第803号）有斐閣、2016年、pp.76-97.

2) 伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：誕生から最初の論文の完成まで」日本大学経済学部編『研究紀要』第83号、2017年、pp.19-42. および、伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：若手研究者時代」日本大学経済学部編『研究紀要』第86号、2018年、pp.73-100.

I アメリカ留学

1 論文「アイデア」の完成

井上は、1965年（昭和40年）12月8日に論文「アイデア——プラトンの場合」を書き上げた。39歳だった。この論文は井上の人生にとって大きな区切りであった。井上はこう言う。

「『アイデア』 […] を書いたとき、わたしは幼い日から追い求めつづけた一つのこみち小径をついに歩み終えた。と思った。少なくともわたしの前には踏み出すべき大地が無かった。霧はますます深く、視界は相変わらずまったく効かなかったが、逆巻く暗風は途絶え、不思議な晴朗がここにあった³⁾。」「幼い日から自己をつ衝き上げてきた要求は、ささやかながら一つの結実を得た。そう感じた。もはや哲学は終わった、とも想えた⁴⁾。」

「幼い日」とは、1944年（昭和19年）18歳のときを指す。絶望の中で1カ月以上何もできなくなった後、9月17日の夕方に第一高等学校の南寮屋上で井上は神秘的な体験をした⁵⁾。その頃からずっと自分を突き動かしてきた問いが、39歳で書いた論文「アイデア」によって一つの答えを得たと言うのである。

論文「アイデア」は翌1966年（昭和41年）3月31日に日本哲学会の学会誌『哲学』に掲載され、さらに、井上は同年6月11日に日本哲学会第25回大会（北海道大学）で特別報告「アイデア——プラトンの場合」を発表した⁶⁾。日本哲学会では、特別報告については、大会での発表よりも先に論文が公刊される。だから、学会参加者は特別報告の内容をあらかじめ読んでから大会に臨むことができる。

日本哲学会での特別報告「アイデア」について藤本隆志⁷⁾は次のように言う。

「〔井上〕の論考の卓抜した特異さに初めて一驚したのは、一九六六年度の日本哲学会大会で拝聴した特別報告『アイデア』（藤沢令夫⁸⁾氏は「語呂合わせと面白くはないが」と質疑時に評されたが）であり、それに魅かれて読んだ『プラトンへの挑戦⁹⁾』（一九六〇年）であった¹⁰⁾。」

藤本は井上の論考の「特異さ」に接して驚いた。井上の論考は「型破り」という印象を与えたようだ。

3) 井上忠「あとがき」『現場』p.355（執筆時54歳）。

4) 井上忠「あとがき」『パルメニデス』p.365（執筆時69歳）。

5) この神秘体験については、伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：誕生から最初の論文の完成まで」第1節「誕生から旧制一高生時代まで」第3項「自己の問題と絶望」および第4項「神秘体験」を参照せよ。

6) なお、伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：若手研究者時代」p.82で、松永雄二（1929年～、九州大学名誉教授、古代ギリシア哲学）が「1966年（昭和41年）の日本哲学会第25回大会（会場は東京都立大学）」において「アイデアの離存と分有について」という発表をし、この発表を井上が高く評価した、と書いたが、正しくは「1967年（昭和42年）の日本哲学会第26回大会（会場は東京都立大学）」である。訂正する。

7) 藤本隆志（1934～2017年、東京大学名誉教授、英米哲学）。

8) 藤沢令夫（1925～2004年、京都大学名誉教授、古代ギリシア哲学）。

9) 『東大紀要』第20号、1960年（『挑戦』pp.3-36に再録）。

10) 藤本隆志「井上さんを偲ぶ」『追悼集』p.67。

藤本も言うように、井上の特別報告に対して会場にいた藤澤令夫から批判があった。神崎繁¹¹⁾によると、「藤沢先生が『アイデア（出で遭い）』や『異なり（孤となり）』などの〔…〕『語呂合わせ』に苦言を呈された¹²⁾」のである。

確かに、論文「アイデア」には語呂合わせに見える表現がいくつも出てくる。次のとおりである。

「アイデア」と「出で遭い」

「異なる」と「事成る」と「個となる」と「孤となる」と「固となる」と「子となる」

「道化」と「道と化す」

井上は「語呂合わせ」について、学生との対話の形式をした文章の中で次のように言う。（この文章は日本哲学会で特別報告「アイデア」を発表した6カ月後に書かれている。）

「先生の論文を読んで、だれでも気のつくことは、語呂合わせと見えるものが多い点です。あるひとは、語呂合わせだけだとまで言っています。

言葉の披ける途とはそういうものだと思います。語呂合わせだ、といってすませているひとは、人間が言葉を持ち、言葉を使う途、言葉の披く途というものが何か、考えたこともないことになりますよ。かれらは、論理か、一般者か、解説か、ともかく言葉の披け以外の、すりきれた雑巾言語で、真理を汚すことになりましょう¹³⁾。」

「言葉の弱さ」に敏感だった井上¹⁴⁾にとって「語呂合わせ」は苦肉の策だったのだろう¹⁵⁾。

いずれにしても、論文「アイデア」は井上にとって大きな区切りだった。この論文を書き上げたとき井上の心に浮かんできたのは、「なにもない世界の涯に行って落葉が散るのを見たい¹⁶⁾」、「いざ、哲学のないくにへ¹⁷⁾」ということだった。そして、「世界の涯としてそのときこころに浮かんだのは、なぜかアメリカ、それもその東部の波打ち際だった¹⁸⁾」。

こうして、井上は1967年（昭和42年）の夏からアメリカに留学することになるのだが、井上の背中を押したのは、駒場（東京大学教養学部¹⁹⁾）の同僚の大森 莊 蔵²⁰⁾である。

11) 神崎繁（1952～2016年、専修大学教授、古代ギリシア哲学）。

12) 神崎繁「井上哲学シンポジウムの司会にあたって」哲学会編『根拠・言語・存在』（『哲学雑誌』第131巻第803号）有斐閣、2016年、p.4。なお、神崎のこの文章は、2015年（平成27年）11月1日に開催された哲学会第54回研究発表大会（東京大学文学部）における井上忠追悼シンポジウム「根拠・言語・存在——井上忠の哲学」の際の司会者挨拶である。

13) 井上忠「途の埋草 二つ三つ」（1966年昭和41年12月10日脱稿）『刻み1』p.151。

14) 言葉の弱さに関しては、伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：若手研究者時代」第Ⅱ節「哲学とは何か」第1項「井上忠の哲学観」および同節第3項「藤澤令夫の哲学観」を参照せよ。また、本論文本節第2項「留学への決意」でも後述する。

15) しかし、アメリカ留学で「言語分析」という方法を知った後の井上の文章から「語呂合わせ」は減った。

16) 井上忠「あとがき」『現場』p.355。

17) 井上忠「あとがき」『ハルメニデス』p.365。

18) 井上忠「あとがき」『現場』p.355。

19) 所在地は東京都目黒区駒場。

20) 大森 莊 蔵（1921～1997年、東京大学教養学部名誉教授、分析哲学）。

2 留学への決意

留学の前年の 1966 年（昭和 41 年）までに井上は大森と親しくなっていた。大森は井上より 5 歳年上で、分析哲学²¹⁾を日本に紹介するとともに、独自の「大森哲学」を追究した人物である²²⁾。東京帝国大学理学部物理学科を 1944 年（昭和 19 年）に卒業したのち理学部の副手を務め、戦争中は海軍の技術中尉になった。戦後、1946 年（昭和 21 年）に東京大学文学部哲学科に入学し、1949 年（昭和 24 年）に卒業した。井上より 2 年早い卒業である。すぐに東京大学文学部大学院に入学し、翌 1950 年（昭和 25 年）7 月から 1951 年（昭和 26 年）7 月まで、ガリオア資金による特別留学生として、オーバリン大学（アメリカ合衆国オハイオ州）に留学した。「ガリオア資金」というのは、アメリカ政府が抛出した「占領地域救済政府資金」の名称である。日本は 1945 年（昭和 20 年）から 1952 年（昭和 27 年）までアメリカ軍を中心とする GHQ（連合国総司令部）の占領下にあったからである。大森は帰国後、1952 年（昭和 27 年）4 月に東京大学教養学部の助手（科学史・科学哲学研究室）になった²³⁾。

そして、1952 年（昭和 27 年）の夏、ハーバード大学の哲学教授であるモートン・ホワイト²⁴⁾がアメリカ哲学のセミナーをするために来日したが、大森は助手としてホワイトの世話をした。ホワイトは当時の大森について次のように書いている。

「彼自身は当時、自分の将来に関してとても悲観的であった。その理由は主に、彼と、私の有力な《友人》である池上〔謙三²⁵⁾〕との間の哲学上の大きな障壁にあった。池上教授は大森のアメリカ化を心よく思っておらず、しかも一九五二年において、ドイツ哲学の雰囲気は大森が活躍できるようなものではなかったようなのである。〔…〕一九五二年のアメリカでは、大森のような能力を持った男は、哲学界の中で確実に相当なポストについていたであろう²⁶⁾。」

しかし、幸いなことに、大森は翌 1953 年（昭和 28 年）11 月に東京大学教養学部の専任講師になった。そして、1954 年（昭和 29 年）2 月から、ロックフェラー資金により、スタンフォード大学（アメリカ合衆国カリフォルニア州）とハーバード大学（マサチューセッツ州）に留学した。

井上が大森を初めて見たのは、1955 年（昭和 30 年）5 月に大森がこの 2 度めの留学から帰国してきた頃であった²⁷⁾。井上は大学院 5 年めで、結婚²⁸⁾直後である。大森は 34 歳、井上は 29 歳だった。

「大森さんに初めてお目にかかったのは、本郷〔東京大学文学部²⁹⁾〕の研究室で、アメリカからお帰りになったばかりの折であった。白哲の偉丈夫といった風貌で、あ、これが有名な大森さんか、と遠く

21) 分析哲学とは 20 世紀以降の英語圏で最も盛んな哲学。言語分析と緻密な議論が特徴である。

22) 大森の仕事は『大森莊蔵著作集』全 10 巻、岩波書店、1998～1999 年にまとめられている。

23) 大森の履歴は「年譜」『大森莊蔵著作集第十巻』岩波書店、1999 年による。

24) Morton White (1917～2016 年、アメリカ思想史・哲学)。

25) 池上謙三 (1900～1956 年、東京大学文学部教授、現代ドイツ哲学)。

26) モートン&ルシア・ホワイト『日本人への旅』思索社、1988 年、pp.40-41。

27) 井上の妻の井上章子（いのうえ・ふみこ、1932 年～、共立女子大学名誉教授、英語学・英米文学）談。

28) 井上の結婚は 1955 年（昭和 30 年）4 月である。伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：若手研究者時代」第 1 節「研究者としてのスタート」第 3 項「牛山章子との結婚」を参照せよ。

29) 所在地は東京都文京区本郷。

から拝顔した。やがて親しくしていただくようになった³⁰⁾」。

モートン・ホワイトは1960年（昭和35年）と1966年（昭和41年）にも来日し、セミナーを開いている³¹⁾が、その際も大森が世話をしている。特に3度めの来日である1966年のセミナーでは、それまでのようにホワイトが講義するのではなく、日本人の各参加者がそれぞれ論文を提示する形式に変えられた。これは「日本人哲学者がさらに独立できるようにという私〔ホワイト〕と大森の願いから出たものであった³²⁾」。

また、ホワイトは大森・澤田允茂^{さわだのぶしげ}³³⁾・中村秀吉^{ひできち}³⁴⁾の3人と会食した際の会話についてこう言う。

「この二人〔沢田・中村〕は、ある種の日本の形而上学者に対してとても批判的だった。つまり彼ら〔ある種の日本の形而上学者たち〕には哲学的な大胆さが欠けており、哲学史に対してあまりに没頭しすぎていると言うのである。〔…〕当時、沢田、中村、大森の三氏は、極めて伝統的な哲学者とは全く逆の立場をとる、論理的、科学的なトリオを形成していた。けれども大森は、それら伝統的な哲学者たちに対して相対的に好意的なようであった。〔…〕その著作の中で、宇宙の形而上学的な原則を求める伝統的な哲学者たちに対して、明らかに大森は沢田や中村に比べてはるかに大きな共感を示していた³⁵⁾。」

大森の専門は分析哲学だが、ギリシア哲学を専門とする井上の研究にも理解を示していたことが、ホワイトのこの証言から推測できる。

井上が駒場（東京大学教養学部）の教員（専任講師）になったのは、1957年（昭和32年）の1月、30歳のときであり、このとき大森は駒場の助教授だった。だから、二人は同じ大学の同じ学部の同僚である。しかし、井上が人文科学科（哲学研究室）の所属であるのに対し、大森は自然科学科（科学史・科学哲学研究室）の所属であって、研究室が違う。だから、同僚になったからと言って、すぐに親しく話す間柄になったわけではない。しかし、井上は本郷でも授業をするようになり、同じく本郷で授業をしていた大森と時間帯が同じであることに気づいた。そして、一緒に帰宅するようになり、徐々に親しくなっていく。大森は自宅（東京都杉並区永福町）から本郷まで自家用車で往復していたので、井上はその車に便乗したのである。

井上は1986年（昭和61年、60歳のとき）に次のように書いている。

「かれこれ二十年ほど前になろうか。その時もたまたま大森荘蔵さんと本郷の文学部への出講時間が一緒で、車で永福町にあったお宅へ帰られるのに便乗させてもらうことになり、三四郎池^{さんしろういけ}の側に歩いて出た〔…〕。大森さんと親しく語るようになった最初のころで、わたしの渡米のきっかけを与えられた同じ時期だった、と思う³⁶⁾。」

30) 井上忠「大森荘蔵さんの面影」『大森荘蔵著作集第2巻月報2』1998年、p.5.

31) さらに、その後、1976年（昭和51年）と1979年（昭和54年）にも来日している。（ホワイト『日本人への旅』による。）

32) ホワイト『日本人への旅』p.160.

33) 澤田允茂（1916～2006年、慶応義塾大学文学部名誉教授、分析哲学）。

34) 中村秀吉（1922～1986年、千葉大学人文学部教授、分析哲学）。

35) ホワイト『日本人への旅』p.162.

36) 井上忠「あとがき」『哲学の刻み3』pp.233-234.

しばしばふたりは大森の自宅近くの居酒屋で酒を飲みながら車中での話の続きをした。井上がアメリカ留学を決意したのは、ある日の大森との会話の最中だった。

『落葉が見たい。誰もいないアメリカの果てに行って』突然ぼくが叫んだ。『行きなさい。すぐ行きなさい』O氏〔大森荘蔵〕が大真面目な声で（かれはいつも大真面目なのだ）応じた。永福町の駅前のガタピシした赤提灯の店だった。もっともまだ赤提灯にはあかりがはいていなかったと思う。本郷の講義を終わったところへ、これも講義か演習かを済ませたO氏も来て、そのまま二人で（O氏の車で）一目散に引上げたのだから、ガタピシにはまだ暖簾もでていなかった。例の通りである³⁷⁾。

大森はこのときまでにアメリカに3回留学していた。前述のオーバリン大学（1950～51年）、スタンフォード大学とハーバード大学（1954～55年）のあと、フルブライト基金により再びスタンフォード大学とハーバード大学（1964～65年）に留学している³⁸⁾。

井上はアメリカ留学を決意する。大森とこの会話をした日、「家に帰って、おい、アメリカへ行くぞ、と怒鳴ったら、家中が目を廻した³⁹⁾」そうである。井上の妻の章子によると、そのときまでに留学先としてアメリカが夫婦の間で話題になったことはなく、「言語の上からドイツに留学するのではないかと章子は思っていた⁴⁰⁾。井上は第一高等学校では文科五類に属していたが、これはドイツ語を第一外国語とし、英語を第二外国語とする類である。また、日本哲学会の学会誌『哲学』では、外国語で要旨を書くことになっているが、井上は特別報告「アイデア」（1966年昭和41年公刊）の要旨をドイツ語で書いている。井上は英語よりドイツ語の方が得意だったようだ。留学先をアメリカにしたのは大森からの影響であろう。

しかし、留学すること自体に関しては、井上自身に内発的な理由があったと思われる。それは、井上が「哲学」と「言葉」の関係について一貫して自覚的だったということである。

井上は「哲学は各人の主体的な現実としてだけ実行可能である。そして、主体的に哲学を営んでいる哲学者同士の対話としてのみ、哲学史研究は可能である。そうでない場合は思想的内容の形骸的知識が得られるだけであって、それは哲学とはまったく別ものである」と以前から考えていた⁴¹⁾。したがって、「ギリシアであろうか何であろうか、哲学は、哲学であるかぎり、いつでもどこでも同じことではないか。哲学の問題は、いつでもどこでも現在われわれがぶつかっている問題とまったく同じはず⁴²⁾」ということになる。

しかし、「哲学はどんな言葉でおこなうのか」ということが井上にとって常に課題だった。30歳の井上は、「真の愛智が把握する存在の内実の豊かさは、到底言葉の貧弱さに盛ることはできぬ⁴³⁾」と言

37) 井上忠「ぼくのアメリカ」『哲学の刻み4』p.25.

38) 「年譜」『大森荘蔵著作集第十巻』岩波書店、1999年。

39) 井上忠「ぼくのアメリカ」『哲学の刻み4』p.25.

40) 井上章子談。

41) 伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：若手研究者時代」第Ⅱ節「哲学とは何か」第1項「井上忠の哲学観」を参照せよ。

42) 対談「現代にギリシア哲学はいかに生きるか」（井上忠・大森荘蔵・加藤信朗）『理想』第497号（1974年10月号）、p.115（『哲学の饗宴——大森荘蔵座談集』理想社、1994年、p.59に再録）。

43) 井上忠「愛智の道無さをめぐる一考察」『理想』第286号（1957年3月号）、p.75。なお、伊佐敷隆弘「哲学者井上

い、「言葉の弱さ」を痛感していた。それゆえ、「プラトン⁴⁴⁾ からアリストテレス⁴⁵⁾ から、おのれを吹きどよめす感動をうけても、それを『私の』感動の『言葉』以上に表現する術を知らなかった。大森荘蔵氏一流の評言によれば、それは『哲学の言葉ではなく、^{のりと}祝詞です。あなたいつまでも朗々と祝詞をあげているつもりですか』、ということになる⁴⁶⁾」のだった。

論文「アイデア」という一つの頂点に達した井上は「哲学と言葉」の関係について新しいものを求めていたのであろう。だからこそ、大森との会話のなかで「アメリカ留学」という新しい試みが生まれたのではないだろうか。

留学を決意した井上はただちに行動した。思い立ったらすぐに行動するのは井上の特徴である。18歳の神秘体験の翌日すぐに聖書を買って行ったこと⁴⁷⁾ や、法学部3年の春「ギリシア哲学をやろう」と決意しすぐにリデル・スコットのギリシア語辞典を買ったこと⁴⁸⁾ にも表れている。

「翌日、学校へ出て、米国行きのプログラムをなんでも見せろ、と言ったら、五つ六つあるなかにメ切明日まで、というのがあった。ともかく順番に釣糸を垂れるつもりで、まずこれからと、助手に履歴書やら何やらタイプしてもらったり、俄か仕立の研究計画を英語科の先生に直してもらったり、ともかく三四日経ったらアメリカ行きが決まった⁴⁹⁾。」

そして、「大森荘蔵氏の、まさしく時宜の〈立ち現われ〉と言った激励を受けて、やがてわたし〔井上〕は夢想した涯まで実際に旅した⁵⁰⁾」のである。この留学は井上の研究方法に大きな変化をもたらすことになる。

3 オーエンとの出会い

井上は1967年（昭和42年）7月下旬に日本を発った。井上には中学生と小学校高学年の2人の息子がいた。子供たちがもっと小さければ連れて行った⁵¹⁾ が、単身で行くことにした。留学先はアメリカ東部のマサチューセッツ州ボストン近郊のケンブリッジ市にあるハーバード大学である。身分は、同大学内にあるエンチン研究所の客員研究員⁵²⁾ であった。

忠の生涯：若手研究者時代」第Ⅱ節「哲学とは何か」第1項「井上忠の哲学観」および同節第3項「藤澤令夫の哲学観」を参照せよ。

44) Platon（前427～前347年、ギリシアの哲学者）。

45) Aristoteles（前384～前322年、ギリシアの哲学者）。

46) 井上忠「一ギリシア学徒の独白」『刻み4』p.48。

47) 井上忠「二冊の『本』」『刻み4』p.24。なお、伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：誕生から最初の論文の完成まで」第Ⅰ節「誕生から旧制一高生時代まで」第4項「神秘体験」を参照せよ。

48) 井上忠「一冊の本」『刻み4』p.5。なお、伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：誕生から最初の論文の完成まで」第Ⅱ節「法学部から文学部へ」第3項「哲学への決意」を参照せよ。

49) 井上忠「ぼくのアメリカ」『刻み4』pp.25-26。妻の章子によると、アメリカ行きが決まったのは1967年（昭和42年）4月だった。

50) 井上忠「あとがき」『現場』p.355。

51) 井上章子談。

52) 「エンチン」とは北京の古い名前「燕京」に由来する。エンチン研究所はアジア研究を専門とする研究所である。同研究所のサイト <https://harvard-yenching.org/alumni> によると、井上がエンチン研究所の客員研究員だったのは1967年（昭和42年）9月から1968年（昭和43年）6月までの10カ月間である。

井上は、ホノルルとロスアンゼルスを経由してボストンへ向かった。留学前の最後の論文「神よりもなお大なるもの」をホノルルとロスアンゼルスで完成させている⁵³⁾。この論文は「アイデアイ」の内容を簡潔に 12 の大命題とそれを説明する多くの小命題にまとめたものである⁵⁴⁾。留学前の到達点をみずから確認するための作業だったのであろう。留学へ向けた意気込みがうかがわれる。

ボストンは、留学前に夢想したとおり、秋には落葉が延々と散り積もる街だった。井上はこう書いている。

「ハーバードの構内も、ケムブリッジの街も、初秋からクリスマスの本格的な雪の季節まで、限りなく落葉が散り、庭も街も落葉で埋まる。[...] はじめに下宿したワシントン・アベニューの家の向かいには、とてつもなく大きな犬 [...] がいた。やたら大人しいセント・バーナードで、これがいつでも落葉の散る下に座って、じっと街を見ていた。そこでぼくは詩(?)を作った。

落葉が散り 限りなく散り
大きな犬が坐ってる⁵⁵⁾」

ハーバード大学に着くと、哲学部の学部長代理を務めているモートン・ホワイト教授のところへ挨拶に行った。「アメリカ哲学セミナー」を日本で開いた前述⁵⁶⁾のモートン・ホワイトである。

「〔ホワイトは、〕^{あか}赫ら顔を穏やかに^{ほころ}綻ばせながら、われわれはついにオーエンを獲得できた、オーエンのいるここにきみを迎えることができ、わたしは誇りに思っている、ほんとにきみは運がよかった、と軽い興奮を隠さずたたみかけられて、こちらはキョトンとした⁵⁷⁾。」

当時の日本でオーエンは知られておらず、井上も「オーエン」の名前を聞くのは初めてだった。しかし、井上にとって、オーエンとの出会いはアメリカ留学における最大の出来事になる。オーエンからの影響が井上の研究方法を大きく変化させたからである。

G・E・L・オーエン⁵⁸⁾はイギリス生まれで、専門は古代ギリシア哲学である。イギリスのオックスフォード大学(1953～66年)、アメリカのハーバード大学(1966～73年)、イギリスのケンブリッジ大学(1973～82年)で教え、1982年に60歳で亡くなった⁵⁹⁾。オーエンの学生時代の指導教員はギルバート・ライ

53) 論文末尾に原稿の脱稿日が「一九六七・七・二七ホノルル、七・二八ロスアンゼルスにて一部改稿」と記されている。井上忠「神よりもなお大なるもの」『刻み 1』p.212。

54) 12の大命題は伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯:若手研究者時代」第Ⅲ節「『アイデアイ』への道」第3項「『根拠』『全体』『作品』」で引用し、説明した。

55) 井上忠「ぼくのアメリカ」『刻み 4』p.26。なお、井上はプリマス・プランテーション(メイフラワー号の上陸地)やメトロポリタン歌劇を見に行くなど、それなりに観光をした(井上忠「ぼくのアメリカ」『刻み 4』pp.27-30)。また、途中から同じアパートに住むことになった藤本隆志は大きな車を持っており、藤本の妻子と井上夫妻の5人でナイアガラ、プリマス、バージニア州、メイン州などに旅行した(井上章子談)。

56) 本論文本節第2項「留学への決意」。

57) 井上忠「もう一つの『存在』の罨」『刻み 3』p.146。

58) Gwilym Ellis Lane Owen (1922～1982年)。

59) オーエンの書いた論文のうち、「プラトン対話篇における『ティマイオス』の位置」(1953年)、「エレア派の問い」(1960年)、「内属性」(1965年)、「アリストテレスと存在論の罨」(1965年)、「アリストテレスの快樂論」(1972年)が翻訳されている(井上忠・山本巍編訳『ギリシア哲学の最前線Ⅰ・Ⅱ』東京大学出版会、1986年所収)。また、「個と一般」(1979年)が井上によって抄訳・紹介されている(井上忠「G・E・L・オーエン『個と一般』」『理想』1979年9月556号、「G・E・L・オーエン『個と一般』(二)」『理想』1980年4月563号、「G・E・L・オーエン『個と一般』(三)」

ル⁶⁰⁾である。ライルは『心の概念⁶¹⁾』の著者として有名な分析哲学者であるが、プラトンについての本 (*Plato's Progress*, 1966) も書いている。斎藤忍随⁶²⁾によると、ライルはこの本の中で「プラトンは最初、イデア論の旗を高くマストに掲げて船出したが、途中でその旗をおろし、論理学者として前進した」と主張しているそうである⁶³⁾。

井上とオーエンが出会ったとき、井上は41歳で、オーエンは45歳だった。

「ハーバードでのG・E・L・オーエンとの出遭いは、衝撃だった。いやそう言うては語弊がある。オーエンの講義はその当時のわたしにはまったく理解の外にあった。いくら眼を皿のようにして、かれが講義するテキストのその箇所を睨んでも、かれの説明は浮かんでこなかった。惨憺たるものであった。根本から方法が違っている⁶⁴⁾。」

オーエンの「方法」とは何だったのか。オーエンの指導のもとケンブリッジ大学で1983年に博士号を取ったG.R.F. フェラーリ⁶⁵⁾は、オーエンの研究方法を「分析的手法」と呼び、それは「現代哲学のツールや方式を古代哲学へ用いて、古代の哲学者たちを批判的・起源的に見極めるという手法」であると述べている。「現代哲学のツール」とは、現代の分析哲学で用いられている記号論理学や言語分析のことである。また、「起源的」とは古代哲学者のテキストの中に現代哲学的ツールの起源すなわち萌芽を見いだすという意味である⁶⁶⁾。

井上は帰国して5年後にこう書いている。

「現在のギリシア哲学研究の第一線は、もはやプラトンやアリストテレスの業績を、過去の思想遺跡として探り描く態度ではなく、プラトンを、アリストテレスを、いまここでのわれわれの間答の相手として呼び出し、当面の分析手法が到達しつつある現状の中で、相互の方言を、したがって相互の思想性を消去しつつ、かれらとわれわれがともに向う問題そのものを洗いあげてゆく段階にある。[...] G・E・L・オーエンにとって、アリストテレスを論ずることは、ともに哲学しつつあるオックスフォードかハーバードの同僚教授を論評するごとくである⁶⁷⁾。」

プラトンやアリストテレスをあたかも現代の同僚のように扱うオーエンの態度は、分析哲学の「非歴史的」という特徴に由来する⁶⁸⁾。分析哲学が過去の哲学を論じる際、(歴史家がするように)その哲学の置かれた歴史的背景に関心を示すのではなく、(数学者が過去の数学を論じるときと同様に)問題とそ

【理想】1980年5月564号)。

60) Gilbert Ryle (1900～1976年、オックスフォード大学教授、分析哲学)。

61) *The Concept of Mind*, 1949. 坂本百大ほか訳『心の概念』みすず書房、1987年。

62) 斎藤忍随 (1917～1986年、東京大学名誉教授、古代ギリシア哲学)。

63) 斎藤忍随「第二次大戦後のプラトン研究——新バーネット・テイラー説」『幾度もソクラテスの名をⅡ』みすず書房、1986年、p.68。

64) 井上忠「一冊の本」『刻み4』p.8。

65) G. R. F. John Ferrari (1954年～、カリフォルニア大学バークリー校教授、西洋古典学)。

66) この段落はG.R.F. フェラーリ「アメリカにおける大学院教育としての古代哲学」『メタプティヒアカ：名古屋大学大学院文学研究科教育研究推進室年報』第2号、2008年、pp.113-114による。

67) 井上忠「ギリシア哲学の最前線——G・E・L・オーエンのこと」『現代思想』1973年8月号、pp.233-234。

68) 大草輝政「プラトンと分析哲学」内山勝利編『プラトンを学ぶ人のために』世界思想社、2014年、p.244。

の解法に関心を集中する。このことが、分析哲学が「非歴史的」と呼ばれる理由である。

オーエンの「分析的的手法」という方法は「分析哲学と古典文献学との接触融合⁶⁹⁾」から生まれた。斎藤忍随は「分析哲学と古典文献学との接触融合が、かつてないほどの大きな研究者の共同空間を出現させたかのように見える⁷⁰⁾」と言い、また、そのような接触融合が、欠点は持ちつつも「あらたに多くの実りをもたらしてくれたことは、疑いようがないだろう⁷¹⁾」と好意的に評価している。

古代ギリシア哲学研究への分析的手法の導入は1950年代末から1960年代にかけて始まり、その結果、古代ギリシア哲学研究は大きく変化した⁷²⁾。井上によれば、「ギリシア哲学が、現代に哲学しつつあるわれわれの現場へ、いま、まさに現代の哲学そのものとして登場してきたのである⁷³⁾」。オーエンはこの大きな変化の立役者の一人だった⁷⁴⁾のだが、1960年代の日本にこの変化はまだ届いていなかった。斎藤忍随は1978年(昭和53年)の時点においてすら、「わが国の場合でも、イギリス、アメリカのプラトン研究が第二次大戦後に提出した問題に積極的興味を示している研究者は、はなはだ少ないように私には思われてならない⁷⁵⁾」と書いている。

さらに、井上は、研究者どうしの共同討議が重視されているようすをハーバードで初めて経験した。

「わたしははじめて哲学が文字通り学界を形成し、一つの地平をなして躍動する姿に出遭った。『アイデア』もそうだけれど、それまでわたしは、『私が哲学する』ないしはそう自称する人びとしか知らなかった。しかしいまわたしを押し包んだのは、哲学が人びとを、しかも『私』ではなく『われわれ』を賦活化し、それぞれの〈わたし〉が哲学の最前線の一翼を担って惜しみなく労力を注ぎつづけている地平そのものであった。『私』が恥ずかしくなる厳しい地平がそこにあった⁷⁶⁾。」

これを井上は「私哲学から哲学への変容」と呼ぶ⁷⁷⁾。「私哲学」とは「私小説」をもじった井上の造語であり、その例として道元⁷⁸⁾と西田幾多郎⁷⁹⁾を挙げている。ハーバードで体験したのは、論文「アイデア」に結実したような私哲学、すなわち、「哲学徒の身を実験の現場として理性の明るさを結晶させ」る活動ではなかった⁸⁰⁾。哲学の問題そのものについて「学者同士が汗血を絞って批判し合い検討しぬいたところに浮かび出てくるなにか⁸¹⁾」を求める活動だった。

69) 斎藤忍随「第二次大戦後のプラトン研究」『幾度もソクラテスの名をⅡ』p.69.

70) 斎藤忍随「第二次大戦後のプラトン研究」『幾度もソクラテスの名をⅡ』p.69.

71) 斎藤忍随「第二次大戦後のプラトン研究」『幾度もソクラテスの名をⅡ』p.122.

72) 大草輝政「プラトンと分析哲学」『プラトンを学ぶ人のために』p.243.

73) 井上忠「いま哲学の現場から」『ギリシア哲学の最前線Ⅰ』1986年、p.i(執筆時60歳).

74) この変化を代表するのは、オーエンの他に、ヴラストス(Gregory Vlastos, 1907～1991年)がいる。ヴラストスは、プリンストン大学やカリフォルニア大学バークレー校で教えた。論文「『バルメニデス』における第三人間論」(1954年)および「ソクラテスの論駁法」(1983年)が翻訳されている(井上忠・山本巍編訳『ギリシア哲学の最前線Ⅰ』東京大学出版会、1986年所収)。

75) 斎藤忍随「第二次大戦後のプラトン研究」『幾度もソクラテスの名をⅡ』p.120.

76) 井上忠「あとがき」『現場』p.355(執筆時54歳).

77) 井上忠「私哲学を越えて」『刻み3』p.5(執筆時50歳).

78) 道元(1200～1253年、禅僧).

79) 西田幾多郎(1870～1945年、京都大学名誉教授、哲学).

80) 井上忠「私哲学を越えて」『刻み3』pp.3-4.

81) 井上忠「哲学者 走る」『刻み4』p.43(執筆時52歳).

井上は初めてオーエンと話したときのことをこう回想している。

「たどたどしく、貴方の論旨のこれこれの点にはいたく同感である、と敬意を表したら、途端に、なぜ他の点には反対なさるのか、との反問がはねかえってきて、英国型発想の現物に初めて出喰わしたこちらは、目を白黒させるほかなかった⁸²⁾。」

ドライな討議を優先する分析哲学の研究スタイルに出会った初めての経験だった。井上はハーバードで体験した研究スタイルを「爽快な砂漠」と呼ぶ。

「筆者は、はじめてアメリカ東部に滞在して、個人好みの思想や体系の呼号もなく、ただ一面の砂漠に脈打って移動する砂丘のごとく、しかも異様なまでの高度な燃焼を保ちつづける哲学の学界地平を親しく知り驚嘆した。だからその帰途、ドイツで丁度同年輩の少壮教授にアメリカ哲学の印象を尋ねられたときには、『まるで爽快な砂漠です』と答えたものである⁸³⁾。」

同じ時期にハーバード大学に留学しパース⁸⁴⁾ 研究に従事していた藤本隆志は「爽快な砂漠」という表現について、井上はハーバードで「新しい広漠たる地平が拓ける解放感を発見」したのではないかと推測している⁸⁵⁾。

オーエンとの出会いによって井上はどう変わったのか。井上は 69 歳のときに書いている。

「哲学などない筈のその大西洋岸で、わたしは G・E・L・オーエンに出会う。オクスフォード・ハーバードとの出会いであった。局面は一変した。これまでわたしが刻み続けてきたのは、たんに自分の現場を体験のままに作品化することだけであった。いまそれは徹底して理論言語化され、世界共通の議論地平に展開されなくてはならない。四十歳も越えたわたしは、二十代の学生に戻ったつもりで、言語分析の手法の開拓に向かった⁸⁶⁾。」

「体験のままに作品化する」のではなく、言語分析という手法によって「理論言語化」し、共同討議にさらす。このことが井上の目標になったと言うのである。

要約しよう。1960 年代に、英語圏の古代ギリシア哲学研究は、分析哲学からの影響を受けて大きく変化した。その特徴は二つある。一つは「言語分析」という手法であり、もう一つは「共同討議」という研究スタイルである。この変化を推進した一人がオーエンであり、井上はハーバードでオーエンと出会うことによってこの変化をじかに浴びたのだ⁸⁷⁾。

82) 井上忠「ぼくのアメリカ」『刻み 4』p.34（執筆時 47 歳）。

83) 井上忠「私哲学を越えて」『刻み 3』p.5。

84) Charles Sanders Peirce (1839～1914 年、アメリカの哲学者)。プラグマティズムの創始者である。

85) 藤本隆志談。藤本と井上のハーバードでの留学期間はおよそ半年重なっている。ちなみに、藤本はアメリカで井上と同じアパート（アーヴィング通り 43 番地）の 2 階の隣の部屋に住んだ（『井上さんを偲ぶ』『追悼集』p.68）。夏休みに近い頃、マサチューセッツ大学からハーバード大学に移った藤本がこの部屋に引っ越して来た（井上章子談）。それまでその部屋には数学者の赤座暢（あかざ・とおる、1927～1983 年、金沢大学教授、関数論）が住んでいた（『モイラ言語』p.91）。赤座が次の留学先のケント大学へ行き部屋が空いた。アパートの家主の女性は藤本について「いい人紹介してくれてありがとう。あの人のパーソナリティが気に入った」と井上章子に言ったそうである（井上章子談）。また、藤本は 1982 年（昭和 57 年）から（井上が定年退職する）1986 年（昭和 61 年）まで東京大学教養学部（駒場）での同僚であった。（藤本自身は 1995 年平成 7 年に東大を定年退職する。）

86) 井上忠「あとがき」『パルメニデス』p.365。

87) ちなみに、古代ギリシア哲学研究におけるこの変化は現代では少し落ち着いたようである。大草輝政（『プラトン

4 初めての外国生活

ところで、井上には初めての外国生活での苦勞もあった。特に食事と会話に苦勞した。

井上はまったくの和食党でパンは一切食べない。カリフォルニア米を中国人に配達してもらい自分で炊き、イタリア系の魚屋でマグロを大量に買ってきて刺身にした。しかし、冬になると、店頭からマグロが姿を消し、冷凍庫に入れておいたマグロも鉛色に変色してきた。安いビールを大量に買い込み、とうがらしの缶詰を肴さかなに飲んで⁸⁸⁾しのいでいた。見かねた近くの日本人が井上に和食を食べさせたこともあったが、とうとうエンチン研究所の秘書のケイトが妻を呼ぶように井上に言った⁸⁹⁾。

ハーバードから3月に（あるいは4月に）東京ボストン間の飛行機の往復チケットが同封された手紙が章子のもとに届いた。「井上の粗末な食生活を助けるように」とのことだった。二人の息子は章子の両親に託し、章子は1968年（昭和43年）5月下旬に渡米した⁹⁰⁾。

ボストン市アーヴィング通り43番地のアパートに着いて、夕食に最初に招待したのはモートン・ホワイト夫妻だった。井上が「アメリカ人はものすごく食べるぞ」と言うので、章子は大量に料理を用意した。それを見たホワイトは「日本人はこんなにたくさん食べるのか？」と驚き、章子が事の仔細を説明すると皆で大笑いになった⁹¹⁾。

また、ホワイトの息子のニックことニコラス・ホワイト⁹²⁾は井上のアパートによく立ち寄り、井上と『ソクラテスは白い』という文の『白い』は何を表すか』という議論を熱心におこなった。当時ニックはハーバードの大学院生（25歳）で、専門は古代ギリシア哲学だった。ニックも結婚しており、井上夫妻と留学先での一番親しい友人になった⁹³⁾。ニックと井上はアリストテレスの『分析論』についても毎週討論をした⁹⁴⁾。

章子によると、井上は英語を読むことはすごくよくできるが、英語の聞き取りがうまくできないために会話が苦手だった。ハーバード大学の新年度は9月から始まるから、8月はボストン大学で寮に泊まりながら口語英語のコースを約1カ月履修した⁹⁵⁾。しかし、あまり効果はなかったようで、「何にも役に立たない」と怒っていたそうである。章子はお茶の水女子大学の英文学英語学専攻と東大大学院の英文科を出ているが、英会話の授業は大学にはなく、高校（女子学院）のときにアメリカ人の先生から習っ

と分析哲学』内山勝利編『プラトンを学ぶ人のために』世界思想社、2014年、p.250)によると、「今日では、もう少し歴史的・文化的な背景や、対話篇というスタイル等々、さまざまな『文脈化』を通過させた上での、より複雑なアプローチがプラトン研究において評価されてきている。そのことは、かつての分析的な手続きにたいする反省を意味しうるけれども、否を突きつけるものではない。分析的手法がもたらした議論の厳密性・明晰性の基準は、もはやプラトン研究の多様なアプローチの前提になったと言ってよいだろう」とのことである。

88) 井上忠「ぼくのアメ리카」『刻み4』pp.31-32.

89) 井上章子談.

90) 井上章子談.

91) 井上章子談.

92) Nicholas White (1942年～、ミシガン大学名誉教授、古代ギリシア哲学)。1976年に *Plato on Knowledge and Reality* という本を公刊し、井上が『西洋古典学研究』第28巻、1980年、pp.142-145に書評を書いた。

93) この段落は井上章子談による。

94) 井上忠「訳者解説」山本光雄編『アリストテレス全集第1巻』岩波書店、1971年、p.597.

95) ハーバードでは英語の家庭教師にも教わっていたようである。『超言語』pp.212-213.

たり、東京都目黒区目黒にあるロゴスという英語学校で学んだりした。章子が渡米した後は、井上は秘書のケイトから呼ばれたとき章子を行かせた。ケイトも井上に言うときは言い方を変えて3回同じことを言わなければならないので、章子が来たことを喜んでいて⁹⁶⁾。

他方、ボストンで同じアパートに住んだ藤本隆志は英語を非常に上手に話した⁹⁷⁾。モートン・ホワイトも「藤本は、たいていの日本人より英語力に恵まれていた⁹⁸⁾」と書いている。また、井上と大学院の同級生である吉田夏彦⁹⁹⁾についてもホワイトは「きわめて上手に英語を話〔す〕¹⁰⁰⁾」と書いている。井上は、自分でもオーエンに「たどたどしく」話しかけたことやオーエンの英語が聞き取れなかったことを記している¹⁰¹⁾。

このように初めての外国生活で食事と会話に苦労した¹⁰²⁾が、井上にとって大きな転機となる実りの大きい留学生活だった。

II 帰国後の再出発

1 日本への帰国

井上の留学期間は1967年（昭和42年）夏から1969年（昭和44年）夏までの2年間の予定であった。しかし、東京大学では1968年（昭和43年）1月から学生紛争が始まり、7月には東大全共闘が結成され、紛争は大学全体に広がっていた。この事態を受け、9月に東京大学の大河内一男¹⁰³⁾ 総長から留学中の東大の教員に対して「学生紛争のために大学が乱れて大変なので、できればすぐ帰国して欲しい」という手紙が届いた。東大からハーバードに来ていた教員たちはみな「帰らない。せっかく来たんだから」と拒否したが、井上は「おもしろい。帰ろう」と言ってひとり帰国を決めた¹⁰⁴⁾。

井上に対してハーバード大学側から「せめてヨーロッパを一カ月見てから帰るのが習わしだから」と勧めがあった。そこでヨーロッパを旅行してから日本へ帰国することにした。10月2日にボストンの空港を発ち、ドイツ、スイス、イタリア、フランスを回り、ピレネー山脈を越えてスペインに入った。そして、フランスのルルド空港からローマへ飛び、日本行きに乗りかえて、インド、タイを経て、11月3日の朝、日本に着いた。旅行の最中に「川端康成¹⁰⁵⁾ が日本人として初めてノーベル文学賞を受賞

96) この段落は井上章子談による。

97) 井上章子談。藤本は国際基督教大学の学生のときに徹底的に英語の訓練を受けたそうである（井上章子談）。

98) モートン&ルシア・ホワイト『日本人への旅』p.259。

99) 吉田夏彦（1928年～、東京工業大学名誉教授、分析哲学）。

100) モートン&ルシア・ホワイト『日本人への旅』p.213。

101) 井上忠「ぼくのアメリカ」『刻み4』pp.33-34。

102) しかし、帰国後、井上はたびたび海外に（学会等で）行き、また、来日した海外の研究者と交流している。英会話も少しずつ上達したのではないか。

103) 大河内一男（1905～1984年、東京大学名誉教授、経済学）。

104) この段落は井上章子談による。

105) 川端康成（1899～1972年、小説家）。

した」というニュースを聞いた¹⁰⁶⁾。結局、井上の留学期間は 1967 年（昭和 42 年）7 月下旬から 1968 年（昭和 43 年）11 月 3 日までの 1 年 4 カ月であった。章子にとっては 1968 年（昭和 43 年）5 月下旬から 11 月 3 日まで約 5 カ月のアメリカ生活だった¹⁰⁷⁾。帰国したとき井上は 42 歳であった。

帰国後、井上は教養学部の学生委員として紛争に対処した。この頃の大森との交流を井上はこう書いている。

「『代々木公園にカクマル四〇、駒場に向かう模様』『炊事門¹⁰⁸⁾にアオカイ三〇集結中』窓外は騒然としていた。大学紛争 酣^{たけなわ}の頃である。『井上サン、ワタシ考えたんです、こういう風に』大森さんは学部本部の四角な黒板に、いきなりマルを二つ描いた。かれは評議員で、学部長代理格の位置にあり、^{わたくし}筆者は学生委員のひとりだった。左のマルが心、右のマルが身体というわけである。二つのマルには、いわゆる因果関係はない、それら同じものの二つの表現である、と大森評議員は、初めて発見した真理を語るという面持ちで話し始めた。[…]われわれが当時取り組んでいた『心身問題』にかんしてである。[…]そこへ『大丈夫、大丈夫、両方ともホンキじゃない』と、情勢分析のヴェテラン、学生委員長長の K 教授がドアから顔を出して、マルマル論争は尻切れトンボになった¹⁰⁹⁾。」

学生紛争に対処するため大学の会議室に詰めている最中でも、井上と大森の会話は哲学に関することだった。また、この時期、井上は自宅での研究時間を深夜から早朝にかけて確保していた。

「当時の学園では、棒をもって走り廻る児^こたちが多く、学生委員だったわたしは、帰宅するや就寝、午前零時から一時にとび起き、八時間机に向って、その分だけ満ち足りたところで、また棒児^{ぼうじ}たちの相手になりに出てゆくといった生活〔だった。〕¹¹⁰⁾

紛争中のある日の出来事を章子が記憶している。1969 年（昭和 44 年）3 月 4 日の大雪の朝、井上の同僚の佐藤俊夫¹¹¹⁾の妻から章子に電話があった。「昨夜、教授会が学生に囲まれ、まだ閉じ込められたままです。皆さんお腹が空いたことと思い、おむすびを作りました。あなたが一番若いので届けてきてちょうだい」とのことだった。章子は佐藤の家に寄って、おむすびを受けとり、大学へ向かった。雪は幸い止^やんでいた。大学の門をくぐると、積もった雪のあちらこちらに血がにじみ、廊下にばらばらになった本が散らばっていた。ようやく教授会室までたどり着き、そこにいた学生に「井上に会いたい」と言うと、学生は「あれっ、ちょっと前に出て行かれましたよ」と敬語で答えてくれた。「どうしたのだろうか」と章子が心配していると、向こうから井上が悠々とやって来た。「どうしたんですか?」と聞くと「なに、ちょっと小便に行ってきたんだよ」とのこと、章子はほっとした。井上は差し入れのおむ

106) この段落は井上章子談による。なお、ヨーロッパ旅行のようすは、井上忠「さらば減っていたす」『刻み 3』pp.129-145 を参照せよ。

107) のちに、章子は共立女子大学の助教授のときハーバード大学にアメリカの詩人研究のために留学し、1975 年（昭和 50 年）8 月から 1976 年（昭和 51 年）8 月までアーヴィング通り 43 番地の同じアパートに住むことになる（井上章子談）。

108) 炊事門というのは、東京大学駒場キャンパスの門の一つ。

109) 井上忠「大森莊蔵さんの面影」『大森莊蔵著作集第 2 巻月報 2』1998 年、pp.4-5。

110) 井上忠「あとがき」『刻み 3』pp.234-235。

111) 佐藤俊夫（1921 年～、東京大学名誉教授、倫理学）。

すびを受け取ると部屋の中に消えていった¹¹²⁾。

この日、加藤一郎¹¹³⁾ 東大総長代行の要請で機動隊が出動し、午前10時45分ころ41名の学生が逮捕された。そして、1968年（昭和43年）7月以来中断していた教養学部の授業は8カ月ぶりに3月24日に再開された¹¹⁴⁾。

2 金曜哲学会を始める

ハーバードでのオーエンとの出会いは、井上にとって哲学への取り組み方を一変させるほどの衝撃だった。しかし、帰国してみると、当然のことだが、日本の哲学は留学前と何も変わっていなかった。

「垣間見てきたハーバード・オクスフォードのすさまじいばかりの（と思えた）学問のうねりに比べれば、わが国の哲学の、ことにギリシア哲学研究の後進性（少なくともそう捉えるほか、当時はすべもなかった）は、むしろ過去のわたし自身も含めて、ただ目を掩う^{おお}ほかはない惨たる姿として映るだけであった¹¹⁵⁾。」

井上はギリシア哲学研究における英米と日本の間の落差に愕然とした。

「後れている。少なくともかれらと同じ戦場で、かれらと同じ武器をもって同等に闘う術をわれわれはもっていない。そして、われわれには、かれらのごとき、つねにみずからをその一隅の一員と位置づけうるに足る学問地平、学界がない¹¹⁶⁾。」

武器もなければ学界もない。彼らには「言語分析」という武器と「共同討議」という学問地平がある。一方、日本の哲学にはどちらもない。しかし、茫然としているわけにはいかなかった。井上は決意する。

「旅から帰って、相変わらず『私』ばかりが混雑している空気にしばし茫然とはしたが、いかにささやかでもいまここに哲学の地平を拓き広げるしか途はない。そう思った。その努力を始めたからには、わたし自身にもまた、かつての『アイデア』で独りの徑^{みち}に仰いだ月を、『われわれ』の地平^{よろこ}で説ぶために微力を傾ける以上の課題はなかった¹¹⁷⁾。」「わたしにとっては、ハーバード体験は、それまでの我が国での『学問』を根本から覆すほどの衝撃であったから、なにがなんでも新しい出発が喫緊事であった¹¹⁸⁾。」「四十台のわたしは、二〇歳の学生に戻って学びの阿修羅となった¹¹⁹⁾」。

「われわれの地平」をつくり、新しく出発するために井上は動いた。

「まったく新しく学問を鍛え直す仲間がほしい。大森氏が大きく首肯き、吉田夏彦氏が目を輝かし、加藤信朗^{しんろう}¹²⁰⁾氏が同調した。東大駒場、都立大、東工大、千葉大、そして東大本郷から人々の熱気が高まっ

112) この段落は井上章子談による。ただし、「1969年（昭和44年）3月4日」という日付は、小出昭一郎「東大紛争のなかの教養学部」『物性研究』第12巻第2号、1969年、p.147による。

113) 加藤一郎（1922～2008年、東京大学名誉教授、民法）。

114) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史——部局史四』東京大学出版会、1987年、pp.221-232, 255-258。

115) 井上忠「あとがき」『刻み3』p.234。

116) 井上忠「あとがき」『刻み3』p.234。

117) 井上忠「あとがき」『現場』pp.355-356。

118) 井上忠「加藤信朗氏『哲学の道』に懐く」『創文』1997年10月号、p.12。

119) 井上忠「あとがき」『刻み3』p.234。

120) 加藤信朗（1926年～、東京都立大学名誉教授、古代ギリシア哲学）。

た。かなりの準備のあと、一九七二年二月四日に、のちに『金曜哲学会』と呼称した新しい会合が殺風景なわたしの研究室で始まった¹²¹⁾。」

この研究会は、1972年(昭和47年)2月4日から1975年(昭和50年)9月26日までおよそ3年半にわたって続けられた。当時の中堅および若手の哲学者たちが集まっている。論題提供者は次のとおりである¹²²⁾。(順序は発表順。かっこ内は会が発足した1972年当時の年齢である。)

井上忠(46歳)、大森荘蔵(51歳)、加藤信朗¹²³⁾(46歳)、吉田夏彦(44歳)、杖下隆英¹²⁴⁾(43歳)、坂部恵¹²⁵⁾(36歳)、山本信¹²⁶⁾(48歳)、黒田亘¹²⁷⁾(44歳)、坂井秀寿¹²⁸⁾(38歳)、久保元彦¹²⁹⁾(30歳)、清水義夫¹³⁰⁾(33歳)、山本巍¹³¹⁾(27歳)、田中享英¹³²⁾(35歳)、廣松渉¹³³⁾(39歳)、奥雅博¹³⁴⁾(31歳)、中村秀吉¹³⁵⁾(50歳)、最年長は大森荘蔵の51歳、最年少は山本巍の27歳だった。

メンバーの専門は古代ギリシア哲学の他に、ヒューム¹³⁶⁾研究、カント¹³⁷⁾研究、ライプニッツ¹³⁸⁾研究、マルクス¹³⁹⁾主義研究、ウィトゲンシュタイン¹⁴⁰⁾研究、そして、分析哲学とさまざまであった。第1回は井上が「パラダイグマ・アイデア」というタイトルの発表をした¹⁴¹⁾。その後、だいたい月に1回、主として第3金曜日に開催された¹⁴²⁾。

金曜哲学会はどんな集まりだったのか。実は、この会は最初「真なる哲学の会」という名称だった。この名称にしたのは、「従来の『思想研究』みたいな『哲学』を払拭して、現実そのものの中で言葉を洗いながら探究しよう、との趣旨¹⁴³⁾」であった。井上は、カント研究者の久保元彦とのエピソードを紹介している。

121) 井上忠「あとがき」『刻み3』p.235.

122) 井上忠「あとがき」『刻み3』p.235.

123) 井上によると、加藤は「どんなに苦勞している時でもこの会だけには、必ず出て来てくれた」。井上忠「加藤信朗氏『哲学の道』に懐う」『創文』1997年10月号、p.12.

124) 杖下隆英(1929年～、東京大学名誉教授、ヒューム研究)。

125) 坂部恵(1936～2009年、東京大学名誉教授、カント・和辻哲郎研究)。

126) 山本信(1924～2005年、東京大学名誉教授、ライプニッツ研究)。

127) 黒田亘(1928～1989年、東京大学名誉教授、英米哲学)。

128) 坂井秀寿(1934～1994年、1978～88年東京大学教養学部助教授、分析哲学)。

129) 久保元彦(1942～1985年、東京都立大学助教授、カント研究)。

130) 清水義夫(1939年～、千葉工業大学名誉教授、論理学)。

131) 山本巍(1945年～、東京大学名誉教授、古代ギリシア哲学)。

132) 田中享英(1937年～、北海道大学名誉教授、古代ギリシア哲学)。

133) 廣松渉(1933～1994年、東京大学名誉教授、マルクス主義研究)。

134) 奥雅博(1941～2006年、大阪大学名誉教授、ウィトゲンシュタイン研究)。

135) 中村秀吉(1922～1986年、千葉大学教授、科学哲学・マルクス主義研究)。

136) David Hume(1711～1776年、イギリスの哲学者)。

137) Immanuel Kant(1724～1804年、ドイツの哲学者)。

138) Gottfried Wilhelm Leibniz(1646～1716年、ドイツの哲学者)。

139) Karl Marx(1818～1883年、ドイツの経済学者・革命家)。

140) Ludwig Wittgenstein(1889～1951年、オーストリアで生まれイギリスで活動)。分析哲学に大きな影響を与えた。

141) 「井上忠教授・資料」p.14。なお、同資料によると、井上は1972年(昭和47年)9月29日にも発表をしている。タイトルは「無題」である。

142) 井上忠「あとがき」『刻み3』p.235.

143) 井上忠「加藤信朗氏『哲学の道』に懐う」『創文』1997年10月号、p.12.

「発表前日、どんな話？ と水を向けると、『カントの空間論』を説明しかけたので、いや、君、その空間論をここでこの机でやり給え、と要請したら、当日、見事に『カントの思想』一切抜きで議論を展開して見せた。鮮やかな一語であった¹⁴⁴⁾。」

毎回の発表も同じような雰囲気であった。

「たんなる研究発表なんかではなく、一切の哲学方言への逃避を許さず、言葉と思考法に対する徹底した吟味と剔抉が倦むことなく続けられた。論題提供者が語り始めるや否や、『失礼、それはこういうことでしょうか』と大森氏が割って入り、吉田氏がそれならこうなると熱烈に展開して、提題者はちぎれとぶ自分の筋をまた懸命に修復する、といったかたちがいつもの事であった¹⁴⁵⁾。」

「哲学方言」とは、細分化された専門分野の中だけで通じる専門用語のことである。哲学研究者の専門分野は哲学史上の有名な一人の哲学者を選ぶことで決まることが多い。たとえば、「私の専門はプラトンです」とか「あの人の専門はウィトゲンシュタインだ」という言い方がなされる。研究者になるために学部や大学院で受ける訓練は、哲学方言を身に付ける訓練でもある。研究者になると、プラトン用語（「はんけい典型イデア」「ぶんゆう分有」など）やウィトゲンシュタイン用語（「言語ゲーム」「家族的類似」など）を論文や議論の中で操るようになる。しかし、「専門用語を操る」とことと「事柄そのものを理解する」とことは別のことである。後者は前者よりもずっと困難な課題である。ところが、事柄そのものを本当はよく理解していないのに、専門用語を操ると、事柄そのものを理解しているような外観が生じることがある。これが「哲学方言への逃避」である。金曜哲学会において参加者たちは専門用語に逃げずに「事柄そのもの」について論じることを求められたのである。

この会は、参加者たちにとって刺激的な研究会であったようだ。

「プラトンやヘーゲルで哲学するのではなく、いまここでなのであり、ここが哲学の現場なのだ。その熱気は伝わり、仲間のひとは大阪から新幹線で通い、時には九州から参加するひともあった¹⁴⁶⁾。」

井上は言う。

「これらの提題のうちには、その後それぞれの哲学者にとって歩みの中軸となった問題が、初々しく鮮やかなかたちで提出されたものも数多い。大森氏の同一体制論¹⁴⁷⁾や黒田氏の基礎行為論¹⁴⁸⁾はその一例である¹⁴⁹⁾。」

金曜哲学会からの波及効果を井上は二つ挙げる。一つは、雑誌『理想』に「哲学最前線」として

144) 井上忠「加藤信朗氏『哲学の道』に懐う」『創文』1997年10月号、p.12.

145) 井上忠「あとがき」『刻み3』p.235. 議論が3～4時間に及ぶことも多かった（吉田夏彦談）。

146) 井上忠「あとがき」『刻み3』p.236.

147) 大森荘蔵の同一体制論は、大森荘蔵「ことだま論——言葉と「もの-ごと」」（大森荘蔵編『講座哲学第2巻 世界と知識』東京大学出版会、1973年）で展開されている（大森荘蔵『物と心』東京大学出版会、1976年、pp.103-154、および『大森荘蔵著作集第四巻 物と心』岩波書店、1999年、pp.115-167に再録）。

148) 黒田亘の基礎行為論は、黒田亘「行為の原因について」哲学会編『自由と行為』有斐閣、1973年や黒田亘「人格と行為」『理想』第486号、1973年で展開されている（どちらの論文も、黒田亘『経験と言語』東京大学出版会、1975年に再録）。

149) 井上忠「あとがき」『刻み3』p.235.

1976年(昭和51年)から1977年(昭和52年)にかけて掲載された12本の論文である¹⁵⁰⁾。執筆者は、金曜哲学会で発表した井上忠・大森荘蔵・吉田夏彦・黒田亘・山本巍・廣松渉・中村秀吉の他に、松永雄二・藤本隆志・上田閑照¹⁵¹⁾・村上陽一郎¹⁵²⁾の計11名である¹⁵³⁾。井上は2本書いた。もう一つは、ほぼ同じ時期に開催された「心・身問題の会」という研究会である。こちらは、大森荘蔵、山本信、井上忠、黒田亘、廣松渉の5人が集まって、1974年(昭和49年)12月～1975年(昭和50年)5月および1978年(昭和53年)10月～1979年(昭和54年)3月に、毎月1回月曜日に山の上ホテル(東京都千代田区)で開かれた。この研究会での成果は『「心-身」の問題¹⁵⁴⁾』という本にまとめられ、井上は「言葉・〈もの〉・〈ところ〉——アリストテレスからの接近」という論文¹⁵⁵⁾を書きおろした。

このように、井上は共同討議の場を確保することに努めた。帰国して9年後の1977年(昭和52年)にこう書いている。

「いま筆者は神話風の『深み』や『重み』にそのままの形では一切市民権を認めない言語地平、ちょっと白けるが、一切が公共の吟味に晒されつづける哲学の言葉の地平に立ちたいと考えている。さらに言えばギリシア哲学から『ギリシア』を抜こうと実は希^{こいねが}っている¹⁵⁶⁾」。

井上は、「哲学方言に逃避することなく、一切が公共の吟味に晒されつづける」ような討議の場所を作ろうとしているのである。

3 授業のようす

金曜哲学会が始まった1972年(昭和47年)の井上の授業のようすを当時大学1年生だった松浦寿輝¹⁵⁷⁾が描いている。松浦にとって、井上の授業は決定的な「体験」だった。

「あれはわたしが大学に入学した年、一九七二年〔…〕。早朝の第一限の授業だった。井上先生はいつも三十分ほど遅れて教室に到着し、何が入っているのか、見るからに重そうな嵩張った鞆^{かさば}を、まずどんと教卓の上に置く。と、いきなり語りはじめ、後は教壇を右に左に行ったり来たりしながら、何のノートもメモも見ないまま、やや早口にただひたすら語り続ける。そして一時間ほど経つと、啞然としているわたしたちを尻目に教卓からさっと鞆を取り、身を翻^{ひるがえ}すようにして出て行ってしまふ¹⁵⁸⁾。」

井上はひたすらしゃべり続け、啞然としている学生を残し、教室から去っていく。

「わたしたちが啞然としていたのは、朗々と響く声に乗って途切れることなく雄弁に続く井上先生の言葉の奔流^{ほんりゅう}を、まったくとは言わないが、せいぜいのところほんの割か二割ほどしか理解できなかった

150) 井上忠「あとがき」『刻み3』p.236.

151) 上田閑照(1926～2019年、京都大学名誉教授、宗教哲学).

152) 村上陽一郎(1936年～、東京大学・国際基督教大学名誉教授、科学史).

153) 執筆者名は、「理想 総目次 第五〇一号(1975年2月)より第六〇〇号(1983年5月)まで」『理想』第600号(1983年5月号)、pp.145-167による。

154) 大森荘蔵ほか『「心-身」の問題』産業図書、1980年。

155) 『刻み2』pp.155-216に再録。

156) 井上忠「身体的位置」『現場』p.267.

157) 松浦寿輝(1954年～、詩人・東京大学名誉教授、フランス文学).

158) 松浦寿輝「かつて授業は『体験』であった」『追悼集』p.74.

たからである。多少のギリシア語が混じっているにせよ、この人は基本的に日本語で喋っている。なのに、日本人のわたしがそれを理解できない。こんな尋常ならざることがどうして起こりうるのか。何かとても大事な事柄が、他の誰にもできないような仕方語られていることだけは分かる。この人の発する言葉一つ一つの背後に、恐ろしいほどの知的労力と時間の蓄積が潜んでおり、膨大な文化的記憶の層が積みこまれていることもわかる。だが、哀しい^{かな}哉、無知と無学のゆえに、わたしはその内容を具体的に理解できない。〔…〕沢山の、沢山の、沢山の本を読まねばならず、その道には終りというものがない。わたしはそのことだけは戦慄的に理解した¹⁵⁹⁾。]

井上がしゃべっていることの内容は少ししか分からない。しかし、それが「畏怖」すべきもの、「尊敬」すべきものであることだけは理解できた¹⁶⁰⁾。

「井上先生の講義から、何らかの知識なり情報なりを受け取ったわけではない。彼の講義は単に、或る決定的な『体験』だった。〔…〕井上忠の授業に出たことが役に立ったか否かと問われるなら、何の役にも立たなかったと胸を張って断言しよう。何の役にも立たなかったその授業は、しかしわたしの人生に手渡された、本当にすばらしい、貴重このうえもない贈り物であった¹⁶¹⁾。」

松浦のこの文章には、当時の井上（46歳）のエネルギー溢るような授業のようすと、それを自分の人生への贈り物として受け止める青年（18歳）の姿を見いだすことができる。

井上の授業を受けて進路を変えた学生もいた。渡辺邦夫^{わたなべくにお}¹⁶²⁾はその一人である。渡辺はこの年1972年（昭和47年）に東京大学教養学部文科I類に入学した。この類は、ほとんどの学生が本郷の法学部に進学する。渡辺も入学したときはそのつもりだった。しかし、当時18歳の渡辺は井上の授業に魅了され、進路を変更して哲学を学ぶことにした。そして、法学部ではなく、駒場の教養学部教養学科に進み、さらに、卒業後は駒場の大学院に進み、井上から指導を受け続け、やがて古代ギリシア哲学の研究者になった¹⁶³⁾。

また、1976年（昭和51年）に井上の授業を受けた当時19歳の荻野弘之^{おぎのひろゆき}¹⁶⁴⁾は授業の印象をこう言う。「きちんとした『概説』などではなく、今現在自分が考えていることを、学生の理解力など全く考慮することなく、ひたすら喋りまくる。熱が入ってくるとほとんど鬼神に憑かれたような調子。ノートを取るのが追いつかない。大学の講義というより、新興宗教の教祖の説教みみたいな圧倒的な迫力だった。私にとっては駒場のすべての授業の中で、最も興奮と刺激に溢れた授業だった¹⁶⁵⁾。」

井上の授業の迫力が伝わってくる。当時の井上は駒場の名物教師だったと言ってよいだろう。学生た

159) 松浦寿輝「かつて授業は『体験』であった」『追悼集』pp.74-75.

160) 松浦寿輝「かつて授業は『体験』であった」『追悼集』p.78.

161) 松浦寿輝「かつて授業は『体験』であった」『追悼集』pp.75-77.

162) 渡辺邦夫（1954年～、茨城大学名誉教授、古代ギリシア哲学）。

163) 渡辺邦夫「井上忠先生」『追悼集』pp.98-100. 進路を変えた学生が渡辺の他にもいたことは、神崎繁が伝えている。神崎繁「井上哲学シンポジウムの司会にあたって」哲学会編『根拠・言語・存在』（『哲学雑誌』第131巻第803号）有斐閣、2016年、p.2.

164) 荻野弘之（1957年～、上智大学教授、古代ギリシア哲学）。

165) 荻野弘之談。

ちは井上のことを「イノチュウ」(井ノ忠)と呼んでいた¹⁶⁶⁾。また、同じ1976年(昭和51年)に井上がおこなった演習のようすについて、神崎繁は次のように言う。

「私が大学院に進学して駒場の先生の授業に出席するようになった一九七六年〔井上 50 歳、神崎 24 歳〕には、金曜の先生のゼミは二部構成で、後半ではアリストテレスの『形而上学』Z 巻を読んでいただきましたが、前半は最先端の英米の言語哲学の論文がテキストでした。確か、最初はクリプキ¹⁶⁷⁾の若いころの『真理論』とヘルツベルガー¹⁶⁸⁾『真理論』の論文で、『Ω 完全性』や『Ω 整合性』などという聞いたこともない用語に戸惑った覚えがあります。また、ハートリー・フィールド¹⁶⁹⁾の『タルスキー真理論の物理主義的解釈』などというのもありました。幸い、坂井秀寿先生が解説役で陪席してくださったので、何とかついていくことができました¹⁷⁰⁾。」

神崎にとって、古代ギリシア哲学が専門である井上の演習で分析哲学のテキストを読むことは驚きであった。

「学部時代は仙台〔東北大学〕で〔…〕岩田靖夫¹⁷¹⁾先生に、ともかくギリシャ語のテキストをひたすら正確に読むよう訓練を受け、本郷〔東京大学文学部〕では斎藤忍随先生にその続きの訓練を受けていましたので、駒場での体験は大変なカルチャー・ショックでした¹⁷²⁾。」

井上が分析哲学の成果を積極的に吸収しようとしていることがうかがわれる。また、神崎よりも数年あとに演習に参加した荻野弘之や渡辺邦夫によれば、演習の前半はアリストテレスのテキスト(『デアニマ(魂について)』『形而上学』『分析論後書』など)を読み、後半は、年度により、分析哲学のテキスト(クリプキやウィギンズ¹⁷³⁾など)を読んだり¹⁷⁴⁾、参加者が回り持ちで発表をしたりした¹⁷⁵⁾。発表者は哲学研究室の教員と院生(さらに、ゲストの大森荘蔵、廣松渉、吉田夏彦)であった。発表の際、教員同士で議論した。これは本郷の授業には全くない要素だった¹⁷⁶⁾。「共同討議」を求める井上の態度

166) 筆者(伊佐敷、1956年～、日本大学教授、分析哲学)が文科I類の1年生として井上の授業を受けたのは1975年(昭和50年)だが、当時、周囲の学生たちは井上のことを「イノチュウ」と呼んでいた。また、1980年代半ばに井上の授業を受けた納富信留(のうとみ・のぶる、1965年～、東京大学教授、古代ギリシア哲学)も「イノチュウ」と呼んでいたと言う(納富信留「井上忠先生へ 送る言葉」『追悼集』p.15)。

167) Saul Aaron Kripke (1940年～、プリンストン大学名誉教授、分析哲学)。クリプキは様相概念(可能性や必然性)の研究を通して分析哲学の中に形而上学を復権させた。

168) Hans George Herzberger (1932年～、トロント大学名誉教授、分析哲学)。

169) Hartry H. Field (1946年～、ニューヨーク大学教授、分析哲学)。

170) 神崎繁「井上哲学シンポジウムの司会にあたって」『根拠・言語・存在』p.4。

171) 岩田靖夫(1932～2015年、東北大学・仙台白百合女子大学名誉教授、古代ギリシア哲学)。

172) 神崎繁「井上哲学シンポジウムの司会にあたって」『根拠・言語・存在』p.4。

173) David Wiggins (1933年～、オックスフォード大学名誉教授、分析哲学)。ウィギンズは「同一性の絶対性」や「本質主義」そして「実体概念の重要性」を主張した。

174) 神崎繁「井上哲学シンポジウムの司会にあたって」『根拠・言語・存在』p.5および渡辺邦夫談によると、クリプキ『名指しと必然性』(Naming and Necessity)、クリプキ『ウィットゲンシュタインのパラドックス』(Wittgenstein on Rules and Private Language)、ウィギンズ『同一性と時空連続性』(Identity and Spatio-Temporal Continuity)を読んだ。また、渡辺邦夫談によると、カプラン(David Kaplan, 1933年～、カリフォルニア大学教授、分析哲学)やデイヴィッド・ルイス(David Lewis, 1941～2001年、プリンストン大学教授、分析哲学)の著作も読んだ。

175) 荻野弘之談、渡辺邦夫談。

176) 荻野弘之談。

の表れであろう。

アリストテレスを読むときの井上について渡辺は、「井上先生の演習のこだわりはすごくて、週に数行のテキストしか進まないとか、次の週まったく同じところから始めるということさえ何回もあった」と言う¹⁷⁷⁾。また、井上は本郷でも演習をした。1980年度（昭和55年度）と1981年度（昭和56年度）はプラトンの『テアイテス』を読んだ¹⁷⁸⁾。毎週当番を決めて、原文を読み、訳をつけていく。その合間にポイントを議論する。「原文の読みなど細かい点を正確に読んでいくのが意外でもあった」と荻野は言う¹⁷⁹⁾。前述¹⁸⁰⁾のように、当時の井上は「ギリシア哲学から『ギリシア』を抜こうと希っている」が、それは、プラトンやアリストテレスのテキストの丁寧な読解を放棄することではなかった。

4 『哲学の現場』

帰国後の井上は「言語分析」という新しい手法と「多彩な専門分野の哲学研究者たちとの共同討議」という新しい研究スタイルを手に入れた。では、それらによって、どのような研究成果をあげたのか。

帰国直後の1970年（昭和45年）に井上は「倫理学を超えるものから¹⁸¹⁾」と「事実、根拠、作品化——哲学の途の拓きの一例¹⁸²⁾」という2本の論文を公刊したが、その内容は留学前の議論と同じである。翌1971年（昭和46年）には、日本での加藤信朗との読み合わせ¹⁸³⁾やハーバードでのニコラス・ホワイイトとの議論を経て10年がかりで完成させた¹⁸⁴⁾アリストテレス『分析論前書』の翻訳¹⁸⁵⁾を公刊した。

しかし、このあと1972年（昭和47年）7月31日に脱稿した論文『『このもの』とは何か¹⁸⁶⁾』は「新しい途の第一歩¹⁸⁷⁾」であった。帰国して4年が経過し、井上は46歳だった。この論文は黒田亘の論文「形相認識と経験¹⁸⁸⁾」への応答として書かれた。黒田は、金曜哲学会の論題提供者のひとりであり、東京大学文学部哲学科以来の親友である¹⁸⁹⁾。ウィトゲンシュタインを日本に紹介するとともに、分析哲学

177) 渡辺邦夫談。

178) 荻野弘之談。その後、1982～1983年度はプラトン『ソピステス』、1984年度はパルメニデス断片を読んだ（荻野弘之談）。

179) 荻野弘之談。

180) 本論文第Ⅱ節「帰国後の再出発」第2項「金曜哲学会を始める」末尾。

181) 佐藤俊夫編『倫理学のすすめ』筑摩書房、1970年、pp.241-306（井上忠『刻み3』pp.159-232に再録）。

182) 吉田夏彦編『哲学序説』新曜社、1970年、pp.17-47（『刻み1』pp.213-255に再録）。

183) 加藤信朗との『分析論』の読み合わせについては、伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：若手研究者時代」第Ⅲ節「『イデア』への道」第1項「若手研究者として」を参照せよ。

184) 井上は、「この翻訳はおよそ十年の歳月を消費し、岩波〔書店〕が用意した箱根の宿に籠ったりしたが、筆者の方はとうとうハーバードにまで持ち込んで、ケンブリッジの下宿で徹夜につぐ徹夜となった」（井上忠「加藤信朗氏『哲学の道』に懐く」『創文』1997年10月号、p.11）、「猛吹雪の屋外を見ながら、朝から、山なすビールを背に、日本から空輸した葉唐辛子の罐詰をあけて、飲んで仕事翻訳をやった」（井上忠「ぼくのアメリカ」『刻み4』p.32）と書いている。

185) 山本光雄編『アリストテレス全集第1巻』岩波書店、1971年。

186) 山本信編『講座哲学1 哲学の基本概念』東京大学出版会、1973年、pp.113-140（『現場』pp.73-100に再録）。

187) 井上忠「あとがき」『現場』p.356。また、井上忠「あとがき」『パルメニデス』p.366を参照せよ。

188) 山本信編『講座哲学1 哲学の基本概念』東京大学出版会、1973年、pp.89-112（黒田亘『経験と言語』東京大学出版会、1975年、pp.138-162に再録）。

189) 黒田との交友については、伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：若手研究者時代」第1節「研究者としてのスタート」第3項「牛山章子との結婚」を参照せよ。

を広い観点（カント、ライプニッツ、ホッブズ¹⁹⁰）から捉え追究した哲学者である¹⁹¹。

黒田はこの論文の中で、「経験的事実の記述や説明が言語の唯一の機能なのではない。事実を記述するのではなく、記述の条件をはじめてつくりだすような言語行為がたしかに存在するのである。实在認識の根拠をめざす探究にとって、なによりも確実な手がかりとなるのはそのような言語行為であろう。そこではことばが事実に従い、事実を写すのではなく、ことばが事実を先行し、事実の意味をさだめるのである¹⁹²」と主張する。つまり、黒田にとって、言語そのものが研究対象なのではなく、言語への注目はあくまでも哲学的問題の解決のための手段である。そのような手段たりうるのは、言語が事実を先行し事実の意味を定める場面があるからである。この点に関して井上も同じ考えを持っていた。井上は言う。

「言語の考察には、おおまかに言って、言語を対象として分析し、なんらかの理論ないし枠組みによってこれを再構成する途と、言語使用そのものを追って、そこに展開される（広く、存在の、とでも言える）風光を凝視する途とが区別できよう。〔…〕アリストテレスには、前者の立場で纏まりをもつ言語理論は、殆どない。しかし後者、すなわち言葉による（存在の）途の披きに傾けたかれの努力には、息を吞ませるものがある¹⁹³。」

井上もアリストテレスと同じく、言語の考察を存在の探究のためにおこなう。つまり、井上にとって、言語の探究は手段であって目的でない。また、井上は言う。

「言葉がまず遊戯して、わが身の棲まう^す近みが、経験の地平として開かれる¹⁹⁴。」「われわれの日常経験から根本経験にいたるまで、その全体を支え^{しんとう}滲透しているのは言葉である¹⁹⁵。」

つまり、黒田と同様に、井上も「言語が事実を先行する場面」に注目する。言語のこのような働きに注目することは英米の分析哲学には希薄¹⁹⁶であり、黒田や井上が英米の「言語分析」を主体的に消化した結果である。

論文「『このもの』とは何か」を皮切りに井上は新しい成果を次々に発表していく。翌1973年（昭和48年）には次の論文6本を書き上げている。

- ・「死の試論¹⁹⁷」（1973年昭和48年1月10日脱稿）
- ・「途の灯しとしての言葉¹⁹⁸」（同2月6日脱稿）

¹⁹⁰ Thomas Hobbes (1588～1679年、イギリスの哲学者)。

¹⁹¹ 黒田の仕事は、3つの主著（『経験と言語』東京大学出版会、1975年。『知識と行為』東京大学出版会、1983年。『行為と規範』勁草書房、1992年）にまとめられている。また、黒田亘編『ウィトゲンシュタイン・セレクション』平凡社、2000年（初版1978年）はウィトゲンシュタインの主要テキストのアンソロジーである。ちなみに、黒田は筆者（伊佐敷）の学生時代の指導教員である。

¹⁹² 黒田亘「形相認識と経験」山本信編『講座哲学1 哲学の基本概念』p.110（黒田亘『経験と言語』pp.159-160に再録）。

¹⁹³ 井上忠「アリストテレスの言語空間」『挑戦』p.274。

¹⁹⁴ 井上忠「途の灯しとしての言葉」『挑戦』p.262。

¹⁹⁵ 井上忠「いま一つの講義」『挑戦』p.287。

¹⁹⁶ ただし、黒田が研究していたウィトゲンシュタインは例外的存在である。

¹⁹⁷ 『理想』第477号、1973年（『刻み1』pp.257-286に再録）。

¹⁹⁸ 『月刊言語』第2巻第3号（1973年4月号）、大修館書店（『挑戦』pp.261-273に再録）。

- ・「ギリシア哲学の最前線——G・E・L・オーエンのこと¹⁹⁹⁾」(同7月14日脱稿)
- ・「アリストテレスの言語空間²⁰⁰⁾」(同7月27日脱稿)
- ・「同一性——アリストテレスによせて²⁰¹⁾」(同10月12日脱稿)
- ・「ある補遺²⁰²⁾」(同12月12日脱稿)

これらのうち、最初の「死の試論」は「なお習作の域をでていない」が、「それまでの捨て身の告白から一転して言語の洗いを哲学の方法として開拓しようとした」ものである²⁰³⁾。つまり、井上によれば、留学前の自分の方法は「捨て身の告白」であり、留学後の方法は「言語の洗い」である。

「死の試論」は雑誌『理想』第477号(1973年2月号)に巻頭論文として掲載されたが、原稿を依頼したのは、理想社の編集者である木下修^{きのしたおさむ}²⁰⁴⁾(当時27歳)だった。木下は原稿依頼のため1972年(昭和47年)の秋に初めて井上に会った。井上の自宅を訪れたのだ。そのときのようすを次のように描いている。

「アリストテレスの翻訳のことなどいろいろ伺い、ハイデガーに話が及んだ。先生は突然、『ハイデガー・イズ・マイ・エネミー!』、と咆哮された。[...]彼の思索を、深いとか鋭いとか独創的だとか有難がっ
ていてはだめだ、彼が見ていたソレを自分も見る、ソレをつかむ、言葉で刻む、しかも、彼の到達点より三〇年、四〇年あとに生まれたのだから、そのぶん進歩していなければならないのだ、と探究の道のあるべき姿とその厳しさを語られた。二〇世紀最大の哲学者ハイデガーを、倒すべき相手の一人である、挑戦するのは当然のことだと滔々と語られる先生の気迫とスケールの大きさに圧倒された²⁰⁵⁾。」

当時の井上の意気込みの強さが目に見えるようである。なお、このとき木下は、岩崎勉^{つとむ}²⁰⁶⁾訳のアリストテレス『形而上学』(理想社、1942年)の復刊や、ガスリー²⁰⁷⁾の『ギリシア哲学史²⁰⁸⁾』の翻訳権取得の可否について相談した。井上はどちらに関しても否定的であった。その際、木下は『形而上学』の岩崎勉^{いだけかし}訳²⁰⁹⁾と出隆²⁰⁹⁾訳の比較についても尋ねたが、井上の答えは「どちらの訳も一長一短がある。むしろ新訳が出るべきだと思う」というものであった²¹⁰⁾。当時の井上はオーエンに代表されるようなギリシ

199) 『現代思想』vol.1-8(1973年8月号)、青土社、pp.231-244.

200) 『挑戦』書下ろし。pp.271-326.

201) 『理想』第486号(1973年11月号)、pp.34-46.

202) 『東大紀要』第57号、1974年、pp.95-112(『現場』pp.101-118に再録).

203) 井上忠「あとがき」『刻み1』p.290.

204) 木下修(1945年～、雑誌『理想』元編集長・元杏林大学総合政策学部客員教授、出版産業論).

205) 木下修「有難うございました」『追悼集』pp.50-51.

206) 岩崎勉(1900～1975年、早稲田大学教授、古代ギリシア哲学).

207) W. K. C. Guthrie(1906～1981年、ケンブリッジ大学教授、古代ギリシア哲学).

208) W. K. C. Guthrie, *A History of Greek Philosophy*, Vol.1(1962), Vol.2(1965), Vol.3(1971), Cambridge University Press.

209) 出隆(1892～1980年、東京大学教授、古代ギリシア哲学)。出隆訳、アリストテレス『形而上学』岩波文庫、上(1959年)、下(1961年)。出隆訳『アリストテレス全集12形而上学』岩波書店、1968年。なお、出隆は井上の指導教員である。この点については、伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：誕生から最初の論文の完成まで」の第Ⅱ節「法学部から文学部へ」第3項「哲学への決意」および第Ⅲ節「哲学科入学から最初の論文まで」第1項「アリストテレス『形而上学』との出会い」を参照せよ。

210) 木下修談。なお、木下は雑誌『理想』の特集企画についても井上に相談した(木下修談)。

ア哲学研究の新しい流れを日本に取り入れようとしていた。実際、この頃書いた「ギリシア哲学の最前線——G・E・L・オーエンのこと」（1973年昭和48年脱稿）はオーエンを初めて日本に紹介した論文である²¹¹⁾。旧世代の研究に関して井上が否定的に反応したのは自然なことだったかもしれない。

1973年（昭和48年）の7月30日に井上は初めての単著『根拠よりの挑戦——ギリシア哲学究攻²¹²⁾』を脱稿し、翌1974年（昭和49年）3月15日に公刊した。ただし、そこに収められている論文のほとんどは留学前に書かれたものである。最も古いものは井上が27歳のときに執筆した最初の活字論文「アリストテレスの『有』把握」であり、他の論文もほとんどが1967年（昭和42年）の留学前に書かれたものである。しかし、この本の巻末に置かれた2本の論文だけは帰国後に書かれた。それは、上記リストにある「途の灯しとしての言葉」（1973年昭和48年2月6日脱稿）と「アリストテレスの言語空間」（1973年昭和48年7月27日脱稿）の二つである。井上は『根拠よりの挑戦』について、公刊直後の1974年（昭和49年）6月29日におこなわれた座談会でこう言う。

「こんな本でもこれまで出さなかったのは、結局、一番最後に書いた『アリストテレスの言語空間』という論文を、[...] ああいう手のものをともかくどうしても一つ書かなければ、これまでの論文をまとめるというわけにはゆかない、という気があったものですから……²¹³⁾。」

帰国後の成果を含まない状態で最初の単著をまとめたくなかったと言うのである。論文「アリストテレスの言語空間」には、「先言措定^{せんげんそてい}」という井上哲学にとって重要な用語が初めて現われている²¹⁴⁾。この論文について井上は言う。

「従来『主語』とか『基体』とか理由もなく訳し分けられていた〔アリストテレスの用語〕ὕποκειμενον〔ヒュポケイメノン〕を『先言措定』と仮訳してみたところで最初の小さな成功が得られた²¹⁵⁾。」

「先言措定」とは、発話に先行し、発話のための必要条件を作る言語機能である。すなわち、黒田亘の言う「事実に先行し事実の意味を定める」言語機能である²¹⁶⁾。先言措定は発話に先行するから、それ自体は発話されない。論文「アリストテレスの言語空間」（1973年昭和48年脱稿）に先立つ数年間に井上がおこなった大学院での演習に出席した山本巍は言う²¹⁷⁾。

「演習ではアリストテレスの『範疇論^{はんちゅう}』（カテゴリー論）を読みました。（もちろんそれだけではあり

211) 井上忠「もう一つの『存在』の罫」『刻み3』p.157.

212) 井上忠『根拠よりの挑戦——ギリシア哲学究攻』東京大学出版会、1974年。なお、井上の最初の著書は、共著『西洋哲学史（新版）』東京大学出版会、1965年である。古代と中世を担当した。伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：若手研究者時代」p.91を参照せよ。

213) 対談「現代にギリシア哲学はいかに生きるか」（井上忠・大森荘蔵・加藤信朗）『理想』第497号（1974年10月号）、p.115（『哲学の饗宴』pp.58-59に再録）。

214) 井上忠「アリストテレスの言語空間」『挑戦』p.292.

215) 井上忠「一冊の本」『刻み4』pp.8-9.

216) 先言措定については、本論文第Ⅲ節「留学前後の連続性と不連続性」第2項「『現存のアポリア』」で後述する。

217) 山本は1970年度（昭和45年度、25歳）から1972年度（昭和47年度、27歳）までの3年間、大学院生だった。その後、28歳で茨城大学助教授になり、さらに、1981年（昭和56年）36歳のときに東京大学教養学部に移って井上の同僚になった。

ませんでした。) 読んだ理由の一つはハーバードで会ったオーエンの論文『内属性²¹⁸⁾』が『範疇論』を扱っていたことです。(オーエンのこの論文は論争を呼んでいました。) 加えて、井上先生が翻訳した『分析論前書』のような論理学では『ヒュポケイメノン』は『主語』と訳され、『自然学』『範疇論』などでは『基体』と訳されてきた伝統に対して、同じ語が不自然に訳し分けられていることに強い違和感を感じるというご自分の経験もあったと思います。それが結局『先言措定』へと結実していく端緒だったようです²¹⁹⁾。」

帰国してから、「先言措定」という言葉を見つけるまでの5年間、井上が地道に研究を続けていたことが分かる。論文「アリストテレスの言語空間」の中で井上は「日常言語の地平 Lo」「物言語のレヴェル Ld」「分類語のレヴェル Lc」「分析論用の人工言語 La」「現存の近みのレヴェル Ln」などさまざまな言語レヴェルを区別することによって「存在」を探究している。「存在」探究に言語分析という手法を本格的に適用し始めたのだ。そして、この論文以降、〈掴み〉〈述べ〉〈立ち現われ〉などの井上哲学特有のさまざまな用語が生まれることになる。

言語分析という新しい武器を手に入れた井上は、以前にも増して精力的に研究を続け、その成果を次々と発表していく。そして、論文「アリストテレスの言語空間」の7年後、1980年(昭和55年)5月、54歳のときに二つめの単著『哲学の現場——アリストテレスよ 語れ²²⁰⁾』を公刊し、帰国後に得られた研究成果を一つの本にまとめた。42歳で帰国(1968年昭和43年)してから12年が経っていた。「あとがき」で金曜哲学会の仲間に感謝の言葉を述べ、この本を大森荘蔵に捧げている。

「今日まで共に哲学の現場を作り、地平を拓いてきた多くの人びと、わけても『金曜哲学会』に^{こそ}挙り、『哲学最前線』を形成した哲学者たちに、改めて衷心から感謝し、その思いをこめて、この歩みの直接の機縁を作って下さった大森荘蔵氏に、この拙い本を捧げたい²²¹⁾。」

井上は、最初の単著『根拠よりの挑戦』(1973年昭和48年脱稿)から二つめの単著『哲学の現場』(1980年昭和55年脱稿)までの7年間に20本余りの論文を書いた。また、論文の他に、15本の哲学的エッセイを書き、たびたび座談会に出席した。生涯で最も多産な時期が始まった。

まず、論文を挙げよう。かっこ内は脱稿日である。

- ・「プラトンのソクラテス像²²²⁾」(1974年昭和49年2月28日)
- ・「詩の言葉と根拠の言葉²²³⁾」(同6月13日)
- ・「本質論以前——現場言語のうちで²²⁴⁾」(同9月11日)

218) Gwilym Ellis Lane Owen, "Inherence," *Phronesis* 10, 1965 (邦訳は、G・E・L・オーエン「内属性」『ギリシア哲学の最前線Ⅱ』東京大学出版会、1986年、pp.1-17)。

219) 山本巍談。

220) 井上忠『哲学の現場——アリストテレスよ 語れ』勁草書房、1980年(4月14日脱稿、5月20日公刊)。

221) 井上忠「あとがき」『現場』p.358。

222) 秀村欣二・久保正彰・荒井献編『古典古代における伝承と伝記』岩波書店、1975年、pp.101-130(『現場』pp.3-34に再録)。

223) 『理想』第494号(1974年7月号)、pp.12-21(『現場』pp.35-49に再録)。

224) 『理想』第497号(1974年10月号)、pp.1-18(『現場』pp.119-145に再録)。

- ・「実体と内属性——アリストテレス『範疇論』における二つの述語をめぐる²²⁵⁾」(同 9 月 23 日)
- ・「個と種²²⁶⁾」(1975 年昭和 50 年 4 月 3 日)
- ・「人間の自己把握²²⁷⁾」(同 7 月 11 日)
- ・「個体論再考²²⁸⁾」(1976 年昭和 51 年 1 月 16 日)
- ・「パルメニデス²²⁹⁾」(同 7 月 26 日)
- ・「ソクラテス²³⁰⁾」(同 7 月 26 日)
- ・「内属性²³¹⁾」(同 12 月 10 日)
- ・「個体化子^{ψ^{フサイ}232)}」(同 12 月 27 日)
- ・「プラトンの『分有』論から D. スコトゥスの『このもの性』論へ²³³⁾」(1977 年昭和 52 年 9 月 16 日)
- ・「身体の位置——アリストテレスからの証言²³⁴⁾」(同 10 月 14 日)
- ・「人間存在の二層構造²³⁵⁾」(1978 年昭和 53 年 2 月 27 日)
- ・「アリストテレスの『存在』把握²³⁶⁾」(同 7 月 17 日)
- ・「ソクラテスと道元——ギリシア哲学の観点から²³⁷⁾」(同 8 月 9 日)
- ・「哲学とは何か²³⁸⁾」(同 10 月 24 日)
- ・「根拠²³⁹⁾」(同 10 月 24 日)
- ・「G・E・L・オーエン『個と一般』²⁴⁰⁾」(1979 年昭和 54 年 8 月 14 日)
- ・「言葉・〈もの〉・〈こころ〉——アリストテレスからの接近²⁴¹⁾」(同 8 月 29 日)
- ・「いま一つの講義²⁴²⁾」(1980 年昭和 55 年 2 月 12 日)
- ・「存在と知識への序章——ギリシア哲学瞥見²⁴³⁾」(同 2 月 20 日)

225) 『西洋古典研究』第 23 号, 1975 年, pp.41-54 (『現場』 pp.146-164 に再録).

226) 『理想』第 504 号 (1975 年 5 月号), pp.121-142 (『現場』 pp.165-197 に再録).

227) 『余暇問題と関連諸科学に関する基礎的研究 1』1975 年 (『刻み 2』 pp.3-123 に再録).

228) 『理想』第 513 号 (1976 年 2 月号), pp.2-20 (『現場』 pp.198-219 に再録).

229) 生松敬三他編『西洋哲学史の基礎知識』有斐閣, 1977 年 (『概念と歴史がわかる西洋哲学小事典』ちくま学芸文庫, 2011 年として再刊).

230) 生松敬三他編『西洋哲学史の基礎知識』有斐閣, 1977 年 (『概念と歴史がわかる西洋哲学小事典』ちくま学芸文庫, 2011 年として再刊).

231) 『理想』第 524 号 (1977 年 1 月号), pp.2-22 (『現場』 pp.220-243 に再録).

232) 『東大紀要』第 65 号, 1977 年, pp.75-96 (『現場』 pp.244-264 に再録).

233) 中世哲学会『中世思想研究』20 卷, 1978 年, pp.109-114.

234) 『エピステーメー』3 卷 11 号 (1977 年 12 月号), 朝日出版社, pp.88-103 (『現場』 pp.265-282 に再録).

235) 『人間と社会に関する総合研究 II』1978 年 (『刻み 2』 pp.124-154 に再録).

236) 『ギリシア哲学の研究』(『哲学雑誌』第 93 卷第 765 号) 有斐閣, 1978 年, pp.18-38 (『現場』 pp.50-70 に再録).

237) 鏡島元隆他編『講座道元五 世界思想と道元』春秋社, 1980 年, pp.109-134 (『刻み 4』 pp.231-261 に再録).

238) 井上忠編『哲学』弘文堂, 1979 年, 序章.

239) 井上忠編『哲学』弘文堂, 1979 年, 第 V 章.

240) 『理想』第 556 号 (1979 年 9 月号), pp.49-61.

241) 大森荘蔵ほか『「心-身」の問題』1980 年, 産業図書, pp.39-93 (『刻み 2』 pp.155-216 に再録).

242) 『現場』 pp.285-353 書き下ろし.

243) 沢田允茂他編『科学と存在論』思索社, 1980 年, pp.15-36 (『モイラ言語』 pp.3-23 に再録).

・「G・E・L・オーエン『個と一般』(二)²⁴⁴⁾」(同3月14日)

・「G・E・L・オーエン『個と一般』(三)²⁴⁵⁾」(同4月1日)

これらの論文のうち、「詩の言葉と根拠の言葉」(1974年昭和49年6月13日脱稿)と「実体と内属性」(1974年昭和49年9月23日脱稿)は、日本西洋古典学会(山口大学, 1974年昭和49年6月2日)でおこなった発表「アリストテレスにおける〈本質〉の成立」にもとづいている²⁴⁶⁾。「『について述べる』と『において有る』の区別が意味する真相を電光の閃きのごとく受けとったのは、学会発表の二日前、五月三十一日深夜松山市の一角においてであった。興奮した²⁴⁷⁾」と書いている。

論文「個と種」(1975年昭和50年脱稿)は〈掴み〉と〈種〉という井上哲学の重要用語が初めて確立された²⁴⁸⁾論文である。この論文について井上は、「歩みが確実に新しい途を披いてゆく喜びが、筆者自身にあった²⁴⁹⁾」と言う。

論文「内属性」(1976年昭和51年脱稿)は、『哲学の現場』所収の論文のうち「もっとも感銘の留まる論稿」であり、「脱稿に到る寸前には、全身の細胞が透明化したのではないかと思えるほどの明晰が筆者を貫透していた²⁵⁰⁾」とのことである。荻野弘之によれば、「内属性」は最も優れた井上論文の一つである²⁵¹⁾。

また、最初の単著『根拠よりの挑戦』公刊(1973年昭和48年)の頃から対談へ出席することが増えた。二つめの単著『哲学の現場』公刊(1980年昭和55年)までにおこなった対談の実施時期とタイトルは次のとおりである。なお、かっこ内は対談の相手である。

1972年(昭和47年)9月2日「形相と質料²⁵²⁾」(黒田亘・中村秀吉・山本信)

1974年(昭和49年)6月29日「現代にギリシア哲学はいかに生きるか²⁵³⁾」(大森荘蔵・加藤信朗)

1975年(昭和50年)7月11日「ものごと考——哲学の成立根拠をめぐって²⁵⁴⁾」(大森荘蔵・黒田亘)

1975年(昭和50年)10月31日「道元の世界と哲学²⁵⁵⁾」(玉城康四郎²⁵⁶⁾)

1977年(昭和52年)3月4日「哲学とは何か²⁵⁷⁾」(大森荘蔵・沢田允茂・黒田亘・藤本隆志)

244) 『理想』第563号(1980年4月号), pp.81-92.

245) 『理想』第564号(1980年5月号), pp.183-202.

246) 井上忠「あとがき」『現場』p.357.

247) 井上忠「あとがき」『現場』p.357.

248) 井上忠「あとがき」『現場』p.357.

249) 井上忠「あとがき」『現場』p.357.

250) 井上忠「あとがき」『現場』p.357.

251) 荻野弘之談.

252) 山本信編『講座哲学1 哲学の基本概念』東京大学出版会, 1973年, pp.141-162.

253) 『理想』第497号(1974年10月号), pp.114-132(『哲学の饗宴』pp.57-93に再録).

254) 『理想』第509号(1975年10月号), pp.116-142.

255) 『理想』第513号(1976年2月号), pp.21-45.

256) 玉城康四郎(1915～1999年, 東京大学名誉教授, 仏教学).

257) 『理想』第527号(1977年4月号), pp.30-81.

1977 年（昭和 52 年）6 月 19 日「宗教の言葉と根拠²⁵⁸⁾」（八木誠一²⁵⁹⁾）

1978 年（昭和 53 年）9 月 26 日「言語と実在²⁶⁰⁾」（吉田夏彦）

1979 年（昭和 54 年）7 月 15 日「アリストテレスの哲学²⁶¹⁾」（藤澤令夫²⁶²⁾）

これらのうち、仏教学者の玉城康四郎との道元に関する対談が異色であるが、これは井上の『根拠よりの挑戦』を読んだ玉城が対談相手として井上を指名したことによる²⁶²⁾。玉城は対談の冒頭で「〔井上〕の問題意識が道元の根本問題と同質的なものだと、ぼくは感ずる²⁶³⁾」と、指名の理由を述べている。

さらに、雑誌『理想』の 1976 年（昭和 51 年）11 月号から 1978 年（昭和 53 年）1 月号の「地平線」欄に「桐江醴樽^{きりえれいそん}」というペンネームで哲学的エッセイを 15 回連載した。このペンネームは、『理想』の編集長である木下修と二人で考えた²⁶⁴⁾。キリスト教で使われる祈りの言葉であるギリシア語の「キリエ・エレイソン（主よ、あわれみ^{あわれみ}たまへ）」をもじったものである²⁶⁵⁾。

井上は「地平線」欄の連載について、「『哲学の現場』〔…〕の諸論稿と並行しつつ、〔…〕文字通り一歩一歩と途を刻み昇っていった、歩みの軌跡には不可欠な記録である²⁶⁶⁾」と言う。『哲学の現場』に至るいわば研究ノートである。エッセイのタイトルを連載順にすべてあげると、「私哲学を越えて」、「論理・理論の極北に」、「修辞学の流れの中で」、「言葉の薊^{まゆ}」、「推理劇風の舞台の上で」、「H・サカイ氏への手紙」、「明るい秘密」、「伝聞の M・デュシャン」、「おいしい顔」、「来るとゲーデル」、「ソクラテスは何をみたか」、「尻尾^{しっぽ}がちよろり」、「騒騒しい想像」、「さらば滅っていたす」、「もう一つの〈存在〉^{わな}の罫」である²⁶⁷⁾。

留学後の成果をまとめた著書『哲学の現場』のねらいについて「はしがき」で井上は言う。

「本書は、アリストテレスを『哲学史』という『物語』の枠から外して、徹底して現代に哲学するわれわれ自身の現場へ呼び出し、この現場へかれが発言できるものは何かを問いつづけた、最近七年ほどの筆者の歩みの記録である。それは現代哲学の方法と視座を用いてアリストテレスに新解釈の一つを付け加えようと企図したものではない。むしろアリストテレスのもつ哲学エネルギーを現代哲学の主戦場に解放することによって、われわれの哲学の現場そのものを賦活化できれば、との願いに基づいている²⁶⁸⁾。」

これは、この時期の井上の探究のねらいを述べたものでもある。この本のサブタイトルの「アリストテレスよ 語れ」のとおり、井上は、現代において哲学する「われわれの現場」にアリストテレスを呼び出し、発言させようとしているのである。この本の「あとがき」では、さらに挑発的な言い方をする。

258) 『理想』第 531 号（1977 年 8 月号）、pp.30-65.

259) 八木誠一（1932 年～、東京工業大学名誉教授、聖書学）.

260) 『理想』第 546 号（1978 年 11 月号）、pp.2-35.

261) 『理想』第 556 号（1979 年 9 月号）、pp.2-31.

262) 木下修「有難うございました」『追悼集』pp.51-52.

263) 対談「道元の世界と哲学」（井上忠・玉城康四郎）『理想』第 513 号（1976 年 2 月号）、p.22.

264) 木下修談.

265) 木下修談。井上章子談.

266) 「あとがき」『刻み 3』p.236.

267) これらのエッセイはすべて『刻み 3』に再録されている.

268) 井上忠「はしがき」『現場』p. i.

「もはやここでは、プラトンやアリストテレスも、『私』好みのあが秘伝^{ほとけ}や、学殖^{がくしよく}のショーウィンドウに飾られるべき『古典』物語ではなかった。かれらはただ、現代のいまここで、われわれによって拓^{ひら}かれゆく哲学の現場に参加し、発言する義務を負った、われわれの同僚以外ではありえない。発言せよ、アリストテレス君。きみたちはわれわれの現場に耐えうる発言をしているのか、いないのか。もししているのなら、それをわれわれの地平に活勢化し、吟味し抜くことが、きみたちとわれわれの果たさねばならぬ現下の任務である。彼らを遇する術はほかにない²⁶⁹⁾。」

井上は、「プラトンやアリストテレスの言っていたことは、我々にとっていかなる意味を持つのか」を問うている。もともと、「哲学は各人の主体的な現実としてだけ実行可能である。そして、主体的に哲学を営んでいる哲学者同士の対話としてのみ、哲学史研究は可能である。そうでない場合は思想的内容の形骸的知識が得られるだけであって、それは哲学とはまったく別ものである」という考えは若い日から一貫していた²⁷⁰⁾。井上のこの姿勢は、プラトンやアリストテレスを「ともに哲学しつつあるオックスフォードかハーバードの同僚教授を論評する」かのように扱うオーエンからの影響²⁷¹⁾によってさらに強められたのだと思われる。

Ⅲ 留学前後の連続性と不連続性

1 「根拠」のゆくえ

井上は留学前に論文「イデアイ」（1965年昭和40年脱稿、39歳）の冒頭で哲学をこう定義していた。「哲学は、全体としての、根拠を、ここに、作品として、刻みとる、途である²⁷²⁾。」

帰国（1968年昭和43年、42歳）後、「言語分析」や「共同討議」という方法を新たに採用することによって、「根拠の作品化」という哲学観はどうなったのか。放棄したのだろうか。そうではない。帰国して6年後、48歳の井上はこう言う。

「哲学はあくまでことばを対象にするのではなく、言葉が披^{ひら}く明るみに、この近みに、根拠を見、聞き、味わおうとする²⁷³⁾」、「文献学研究や文化史評論が、哲学の途の刻みに一指^{いっし}も触れえないと同様、言語分析そのものが、言葉の披^{ひら}きを見失って、分析の型に執^{しゅう}するなら、その哲学接触は無意味である²⁷⁴⁾。」

また、対談「道元の世界と哲学」において49歳の井上はこう発言する。

「われわれの哲学は根拠の作品化ということにある […]。根拠が命ずる通りに、自分の運命を、根拠

269) 井上忠「あとがき」『現場』p.356.

270) この点については、伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：若手研究者時代」第2節「哲学とは何か」第1項「井上忠の哲学観」および、本論文第1節「アメリカ留学」第2項「留学への決意」を参照せよ。

271) 井上忠「ギリシア哲学の最前線——G・E・L・オーエンのこと」『現代思想』1973年8月号、pp.233-234 および本論文第1節「アメリカ留学」第3項「オーエンとの出会い」を参照せよ。

272) 井上忠「イデアイ」『挑戦』p.204.

273) 井上忠「本質論以前」『現場』p.137.

274) 井上忠「本質論以前」『現場』p.129.

の作品に刻む以外に、わたくしには哲学はないんです。〔…〕わたくし自身を根拠の命ずるよう作品化してゆく、そしてそれによって根拠を掴まえる²⁷⁵⁾。』

井上の「根拠の作品化」という哲学観は維持されている。何よりも、52歳の井上が編集した『哲学』という本²⁷⁶⁾の中で井上が執筆した第V章のタイトルは「根拠」だった。その章の末尾で井上は言う。

「哲学は、譬えてみれば、なにかある完全犯罪者からの挑戦に対する応戦と言えるだろう。世界があり、われわれが生き、日々歩み、歴史が作られてゆく。何故？ 何処から？ 何のために？ 何処へ？ すべては謎である。われわれは、人間と呼ばれる自分自身が何者であるかさえ、まったく知らされてはいない！ われわれは知らされずして存在させられ、生かされ、殺されてゆく。われわれにその影すらも踏ませず、われわれを操り廻りぬくこの手口を、完全犯罪と呼ばずして、何と称したらいいのか²⁷⁷⁾。』

この「われわれひとりひとりをここに生かし殺す」「完全犯罪者」を、井上は「あいつ」「やつ」「そいつ」と呼び、また、「根拠」と呼ぶ²⁷⁸⁾。このように、留学の前後を通じて「根拠」は井上の探究の中心課題である²⁷⁹⁾。

井上の根拠探究の原点は（前述²⁸⁰⁾したように）18歳のとき（1944年昭和19年9月17日）の一高南寮屋上での神秘体験であるが、その後、31歳のとき（1957年昭和32年8月）にも山梨県の瑞牆山のふもとで同様の体験をした²⁸¹⁾。これらはアメリカ留学以前の体験である。しかし、留学から帰国した後も類似の体験をしている。それは、1974年（昭和49年）2月26日48歳のときのソクラテス体験である²⁸²⁾。この体験は東京の井の頭線という電車の中で生じた。

「そうか、ソクラテス²⁸³⁾はこれを見ていたのかと、わたしは抑えようもない喜びに溢れ、肯定に全身を貫かれ包まれて、四周の一切を消して立ち現われたそれを見た。〔…〕何ひとつの物の姿もない、何物も見えない、しかし微塵の不安の影も宿らぬ温かく信頼に充ちた実体がいまわたしの前に否定しようもなくあった。温かく実体にあふれた空無……。それに直面し、それを凝然と直視しながら、わたしはああこれなら何時間でも何日でも見つづけられるはずだと思った²⁸⁴⁾。』

ソクラテスが佇みながら見ていたのは「空無として現前する根拠²⁸⁵⁾」であったと井上は言う。そして、自分もこのとき電車の中でそれを見たと言っているのである。この体験は一高南寮屋上での神秘体験や

275) 対談「道元の世界と哲学」（井上忠・玉城康四郎）『理想』第513号（1976年2月号）、p.41.

276) 井上忠編『哲学』弘文堂、1979年.

277) 井上忠「根拠」『哲学』p.273.

278) 井上忠「根拠」『哲学』pp.271-274.

279) また、引用文中の「完全犯罪者からの挑戦」すなわち「根拠からの挑戦」が、井上の最初の単著のタイトル『根拠よりの挑戦』の由来である。

280) 本論文第1節「アメリカ留学」第1項「論文「イデアイ」の完成」.

281) 井上忠「パルメニデスの歌」『挑戦』pp.39-40. なお、瑞牆山体験については伊佐敷隆弘「哲学者井上忠の生涯：若手研究者時代」第3節「「イデアイ」への道」第2項「信州との関わり」を参照せよ.

282) この日付は井上忠「あとがき」『現場』p.356による.

283) Sokrates（前470～前399、古代ギリシアの哲学者）。しばしば何時間も佇むことがあった.

284) 井上忠「ソクラテスは何をみたか」『刻み3』p.99.

285) 井上忠「プラトンのソクラテス像」『現場』p.34.

瑞牆山体験のような「突如として根拠が現れる」という体験とは違い、長時間持続しうる（「何時間でも何日でも見つけられる」）体験である。そのような違いはあるが、「根拠が現前する」という点では同じである。

いずれにしても、井上哲学の中心課題が、留学の前後を問わず、一貫して「根拠」だったことは、井上の体験からも、その発言からも、間違いないであろう。では、留学後に新たに始めた「言語分析」や「共同討議」という方法と「根拠探究」という課題とはどのような関係にあるのか。帰国（1968年昭和43年、42歳）してから『哲学の現場』を公刊する（1980年昭和55年、54歳）までの時期を井上はのちに次のように捉えている。

「根拠の作品化という主題が、言語機構論を加味されて新しい相貌をとりはじめ […] この新しい機構分析がやっと一つの標識点に到達した²⁸⁶⁾」。

つまり、主題は一貫して「根拠の作品化」であるが、留学後は「言語機構論」（言語分析）が加味され、この主題が新しい「相貌」を取り始めたのである。また、『哲学の現場』（1980年昭和55年）公刊直後に井上は言う。

「哲学の言語に要請される任務は、われわれ一人ひとりの自己を背後から掴んでいるもの、つまりわれわれにとっての掴まれを、われわれの前に、明晰な公共言語の地平において解明述定すること、このこと以外ではない²⁸⁷⁾。」

〈わたし〉を掴んでいるもの、すなわち、根拠を、あくまでも明晰な公共言語の地平において解明する。そのために共同討議を重視する。つまり、「根拠探究」という主題は一貫しており、「根拠の作品化」という哲学観も変化していないのであるが、そのための方法が変化している。かつての方法が「捨て身の告白²⁸⁸⁾」すなわち「体験のままに作品化すること²⁸⁹⁾」（あるいはせいぜい「語呂合わせ」をすること²⁹⁰⁾）であったのに対し、帰国後は、「言語分析」と「共同討議」という方法に変化したということである。要するに、アメリカ留学の前後を通じて、井上の主題は連続しており、他方、その方法は不連続である。

ただし、前述²⁹¹⁾のように、「言語分析」と言っても、「根拠探究」のための方法であるから、英語圏における多くの言語分析と違って、「言語が事実に行先する」場面に着目し、あくまでも「言葉が披く明るみに根拠を見ようとする」ところに井上の「言語分析」の特徴がある。

この特徴をよく表す井上の警告がある。27歳のとき、大学院生の井上は「叡智の道を歩むフィロソフィアの徒には、真理は峻厳そのものであり、怠惰と無能とを一歩も許容しない²⁹²⁾」と書き、53歳のとき、大学教授の井上は「死にもの狂いで勉強していない大学教授なんてナンセンスである。『われら大学教授』

286) 井上忠「あとがき」『哲学の刻み 2』p.220.

287) 井上忠「ソクラテスとエクスタシス」『刻み 4』p.83.（1980年昭和55年7月8日脱稿）。

288) 井上忠「あとがき」『刻み 1』p.290. また、本論文第Ⅱ節「帰国後の再出発」第4項『哲学の現場』を参照せよ。

289) 井上忠「あとがき」『パルメニデス』p.365. また、本論文第Ⅰ節「アメリカ留学」第3項「オーエンとの出会い」を参照せよ。

290) 語呂合わせについては、本論文第Ⅰ節「アメリカ留学」第1項「論文「アイデア」の完成」を参照せよ。

291) 本論文第Ⅱ節「帰国後の再出発」第4項『哲学の現場』。

292) 井上忠「武蔵野雑感」『刻み 4』p.180.

はあくまでもプロ中のプロでなければならぬ²⁹³⁾」と書いた。そして、この言葉を裏切ることなく、井上は生涯精力的に研究を進めてきた。しかし、そのうえで、井上は警告する。

「しかしこの『プロ性』はしばしば奇妙な怠惰と合体する。現場性に身を晒^{さら}して、みずからを問い抜くことをやめて、なにか〈について〉詳述、詳論することがプロフェッショナルであるかのごとく錯覚される場合がそれである²⁹⁴⁾。」

この警告の意味は何か。

「われわれがあいつ〔根拠〕と遭遇する場面にあつては、われわれが企^{たくら}み描くいかなる作業仮説もその根底において果たしてほんとうにそうであるか？ との疑問に、絶対の疑問に、晒され続けている。〔…〕あいつとの現場に晒されつづけてあること、それは実はわれわれが常にしろすと、アマチュアでありつづけざるをえないことを示している²⁹⁵⁾。」

井上にとって「理論言語化²⁹⁶⁾」は、あくまでも「根拠探究」という目的のための手段である。手段自体を目的化してしまつて理論の詳細化・体系化をめざすことは、哲学にとって本末転倒である。このことは、「言語分析」という方法に関しても同様だ。井上はこう考えているのである²⁹⁷⁾。

2 「現存のアポリア」

では、この新しい方法によって、井上は「根拠」という主題を具体的にどのように探究していったのか。井上の議論を見てみよう。

「この机は白い」という文が発話される（〈述べ〉られる）とき、この発話は、この机について、それが白いということを述べている。言い直せば、主語「この机」は一つの物個体（この机）を指示し、述語「白い」はこの物個体の性質（白い）を叙述している。つまり、〈述べ〉の発話において、主語は指示し、述語は叙述する。

「この机」という主語によって眼前の机という物個体が指示されているのだが、そのためには、眼前の物個体が「机」だということの把握がまず必要である。この把握を井上は「〈掴み〉」と呼ぶ。

「〈掴み〉は、現場にあつて、指示や〈述べ〉の発言行為に先立って、おのおののものをそれぞれ実在の個体として了解し捉える言語の働きである。指示や〈述べ〉の言語行為に先立って現場そのものを作る働きと言つてもいい²⁹⁸⁾。」

〈掴み〉は、発話されない分類語（「机」「椅子」「人間」「薔薇」など）によっておこなわれる。これ

293) 井上忠『『ガキ大将』の独白』『刻み 4』 pp.55-56.

294) 井上忠『『ガキ大将』の独白』『刻み 4』 p.56.

295) 井上忠『『ガキ大将』の独白』『刻み 4』 p.57.

296) 井上忠「あとがき」『パルメニデス』 p.365. また、本論文第 1 節「アメリカ留学」第 3 項「オーエンとの出会い」を参照せよ。

297) のちに 69 歳の井上はこう言う。「紆余曲折はあつたが、分析は、発話された言葉に対するいわゆる『言語分析』であつてはならず（それはいかにささやかでも半生の『体験』の重さが許しそうもない!）、もっと言語機構全体を視野に収めて、さまざまな言語レヴェルをそれぞれに活かしつつ包括する分析でなくてはなるまい。それはやがて言語機構分析の登場につながつた。」（「あとがき」『パルメニデス』 pp.365-366.）

298) 井上忠「アリストテレスの『存在』把握」『現場』 p.51.

らの発話されない分類語を井上は「〈種〉」と呼ぶ²⁹⁹⁾。〈掴み〉は発話に先立っているから、〈掴み〉は「先言措定」である。先言措定は、「われわれが発話してなにごとかを述べる場合に、すでに了解済みとなっているのでなければ、〈述べ〉そのものが無意味になってしまう先行諸条件³⁰⁰⁾」である。〈掴み〉は、主語による指示に先立ち、指示を可能にする。そして、〈掴み〉は「生活現場でのわれわれの反応行動、振舞いの定型様式に直結している³⁰¹⁾」。つまり、「〈掴み〉で現場了解しておればこそ、生活現場が成立している³⁰²⁾」のである。

他方、述語による叙述を可能にする先言措定もある。それは、〈こころ〉への〈立ち現われ〉である。述語の機能は、指示された当の物个体（この机）について、発話者の〈こころ〉のうちに立ち現われたもの（「この白さ」）を、類型化された一般語（「白い」）によって分類し平板化して、公共の場へ述べ立てることである。「白さ」も発話されない分類語すなわち〈種〉である³⁰³⁾。また、発話者に〈立ち現われ〉たのは、ある特定の色合いの白さであるが、どんな色合いの白さであるかは無視され、「白い」か「白くない」かの分類として把握され述べられる。

ただし、先言措定のあり方は、人間の身体の大きさに依存している。

「われわれがもし蟻ほどの大きさだったら、さらには大腸菌くらいの大きさだったら、眼前の机を『机』として〈掴む〉ことはないだろう³⁰⁴⁾。」

また、人間の寿命や時間意識にも依存している。

「われわれが不老長寿の生涯をもち、われわれの千年を一秒のごとくにしか感じない鈍感な時間意識をもつなら、われわれのこのテーブルは〔…〕とてもテーブル个体としての有効性は持たないであろう。『このテーブル』と指示しても、〔…〕数刻後にはもうテーブルの跡かたもなく、もう一度『このテーブル』と指さすことはできなくなるであろうからである³⁰⁵⁾。」

先言措定は人間の経験に、いわば「形式」を与えている。

「事実个体がまずあって、われわれがそれを〈掴む〉のではない。われわれが〈掴む〉から事実个体が成立するのである³⁰⁶⁾。」

ここには、「言語が事実に行先する場面に注目する」という井上の基本姿勢³⁰⁷⁾が表れている。

以上のように、井上は、われわれが用いている言語の姿を（先言措定も含めて）明らかにしていく。「かつてはただ『事実は根拠ではない』との断言で切り捨てるほかなかった事実地平も、〈掴み〉と〈述べ〉という言語機能の解明で透明化され言語位相の一つに定着された³⁰⁸⁾」のである。しかし、このようにし

299) 井上忠「アリストテレスの『存在』把握」『現場』pp.52-53.

300) 井上忠「言葉・〈もの〉・〈こころ〉」『刻み2』p.186.

301) 井上忠「いま一つの講義」『現場』p.318.

302) 井上忠「言葉・〈もの〉・〈こころ〉」『刻み2』p.193.

303) 井上忠「アリストテレスの『存在』把握」『現場』pp.55, 60. 井上忠「ある補遺」『現場』pp.106-107.

304) 井上忠「個体化子ヲ」『現場』p.258.

305) 井上忠「根拠」『哲学』p.228.

306) 井上忠「いま一つの講義」『現場』p.332.

307) この姿勢については、本論文第Ⅱ節「帰国後の再出発」第4項『哲学の現場』を参照せよ。

308) 井上忠「あとがき」『パルメニデス』p.366.

て明らかになった言語によっては捉えることのできない側面が、現実経験の地平にあることを井上は指摘する。そして、その側面が「現存のアポリア³⁰⁹⁾」という問いを生み出す。

前述のように、〈掴み〉によって個体が成立するのであるが、〈掴み〉は、発話されない分類語〈種〉によってなされ、特定個体への指示に先行する。つまり、〈掴み〉によって成立している個体は、同種の個体間で区別されない個体、すなわち代替可能な個体である。

「〈掴み〉の地平は同種の個体並列の地平と言っている。〔…〕〈掴み〉は〔…〕いわば〈かけがえのある〉個体の地平を披くと言えよう³¹⁰⁾。」

それゆえ、私の眼前にあるこの机が、なぜ他の場所でなくここで、なぜ他のときでなく今、私と出会っているのか³¹¹⁾、その理由は、〈掴ま〉れていない。すると、次の問いが生じうる。

「現実個体がいまここにある存在の原理は何なのか³¹²⁾。」「〈かけがえのある〉個体しか掴めない言語構造をもっている人間が、しかし実際に出会っているのは、『ソクラテス』とか『私』『君』と言う〈かけがえのない〉、その意味でどうにもものっぴきならない現実性を持つ個体なんです。この否も応もない現実性はどこから〔来るの〕か³¹³⁾」。

この問いが「現存のアポリア³¹⁴⁾」である。この問いにおいて、「『われ』が『いま』『ここ』に出遭う『これ』なる現存³¹⁵⁾」が問われているから、「現存」のアポリアなのである。同時に、この問いは「〈わたし〉がいまここにある存在の原理は何なのか」という問いでもある。したがって、この問いは「根拠による〈掴まれ〉の地平³¹⁶⁾」を問うている。しかし、「われわれ一人ひとりを〈掴み〉存立させ〈ている・筈〉の根拠の働きを、眼のあたりに、眼の前に見ることはできない。〔…〕われわれはただみずからがいわばおのれの後から、背後から〈掴まれ・ている〉ことを了解させられるだけである³¹⁷⁾」。それゆえ、この問いは「アポリア（解決困難な難問）」である。

しかし、井上は、現存のアポリアを解決するための方法をあくまでも言語の探究に求める。「言葉の弱さ」を痛感しつつ³¹⁸⁾、言語を導きとしてこの問いを探究していく。

「この問い〔根拠の問い〕に答えるための必要条件は、人間の地平を構成し成り立たせている言語の全分野を、その全体性・根本性を見失うことなく吟味することであった³¹⁹⁾。」

根拠探究と言語の関係について井上は言う。

「哲学とここで言うのは、〔…〕根拠に向う認識の最前線にあつて身を晒しぬくこと、それだけである。

309) 井上忠「いま一つの講義」『現場』p.347.

310) 井上忠「根拠」『哲学』pp.224-225.

311) 井上忠「アリストテレスの『存在』把握」『現場』p.70.

312) 井上忠「いま一つの講義」『現場』p.347.

313) 対談「アリストテレスの哲学」（井上忠・藤澤令夫）『理想』第 556 号（1979 年 9 月号）、p.27.

314) 井上忠「いま一つの講義」『現場』p.347.

315) 井上忠「『このもの』とは何か」『現場』p.89.

316) 井上忠「いま一つの講義」『現場』p.349.

317) 井上忠「いま一つの講義」『現場』p.350.

318) 前述の本論文第 1 節「アメリカ留学」第 2 項「留学への決意」を参照せよ.

319) 井上忠「いま一つの講義」『現場』p.352.

ただそのためには人間の存在様態そのものとしての言語機構のすべてを精査し、その各部分、各地平のそれぞれを明確に定位して、言葉による不透明を可能なかぎり排除しなければならない³²⁰⁾。「われわれにとって根拠との出で遣いは、われわれが言語使用の可能性を可能なかぎり極め尽くしたその地点で、われわれが何にどのように擱まえられていたのか、という原初構造として浮かび上がってくるのではあるまいか³²¹⁾。」

ここには、根拠探究と言語の間の微妙な関係がある。井上は現存のアポリアを解決するために、最晩年に至るまでさまざまな言語モデルを提起していくのである³²²⁾。

謝 辞

本論文執筆の際、吉田夏彦氏（東京工業大学名誉教授）、井上章子氏（^{ふみこ}共立女子大学名誉教授、井上忠夫人）、故藤本隆志氏（^{たかし}東京大学名誉教授）、山本 巍氏（^{たかし}東京大学名誉教授）、木下 修氏（元『理想』編集長、元杏林大学総合政策学部客員教授）、渡辺邦夫氏（茨城大学名誉教授）、^{おぎの}荻野弘之氏（上智大学教授）から貴重な情報をご提供いただいた。記して感謝申し上げます。また、本論文において言及するすべての方々の氏名から敬称を略させていただいた。ご了解いただければ幸いです。

文献略称表

本論文では以下の略称を用いる。（また、本論文では引用の際に原文にない読み仮名を付け加える場合がある。）

『挑戦』：井上忠『根拠よりの挑戦——ギリシア哲学究攻』東京大学出版会、1974年。

『現場』：井上忠『哲学の現場——アリストテレスよ 語れ』勁草書房、1980年。

『刻み1』：井上忠『哲学の刻み1 性と死を超えるもの』法蔵館、1985年。

『刻み2』：井上忠『哲学の刻み2 言葉に射し透されて』法蔵館、1985年。

『刻み3』：井上忠『哲学の刻み3 知の階梯を昇りつつ』法蔵館、1986年。

『刻み4』：井上忠『哲学の刻み4 運命との舞踏』法蔵館、1986年。

『モイラ』：井上忠『モイラ言語——アリストテレスを超えて』東京大学出版会、1988年。

『超言語』：井上忠『超＝言語の探究——ことばの自閉空間を打ち破る』法蔵館、1992年。

『パルメニデス』：井上忠『パルメニデス』青土社、1996年（新装版2004年）。

『究極』：井上忠『究極の探究——神と死の言語機構分析』法蔵館、1998年。

『追悼集』：『井上忠先生追悼集』井上忠先生追悼集刊行委員会、2014年。

『東大紀要』：東京大学教養学部『人文科学科紀要』。

なお、次の文献は1986年3月までの井上の著作の網羅的なリストである。

『井上忠教授・資料』東京大学教養学部『人文科学科紀要 83 哲学 23』1986年、pp.141-158。

320) 井上忠「あとがき」『刻み1』pp.288-289。

321) 井上忠「これからプラトンを読むために」『刻み4』p.146（1980年昭和55年1月執筆、53歳）。

322) 現存言語（エネルギーイ言語）・運命言語（モイラ言語）・活勢言語（オメガ言語）などである。